東海道名所圖會 三

東海道名所圖會卷之三

目錄

○宮

勅使殿　鎮白門　雲見山　菖蒲沈　透垣　春敲門　御井清水　旗綾　井樓組

古渡　一鳥居　二鳥居

左右樂所　海藏門　御廐　王井里　蒲冠者出誕所

贊田左神宮

神樂所　政所　松岡祠

神輿舍　御鐶殿　鷲峯山　中之泰

正殿　祭文殿　神庫　神宮寺　鳴御前　清雪門

渡殿　旭廊　橋部屋　不動堂　白鳥山　洞北沈

鉤殿　拜殿　石大鐵

土用殿

八劔神社

高藏神社

鉾取社　新宮

水神祠

日破神社

氷上神社

大福田社

源左夫神社

紀左夫神社

孫若神社

寶田神社

南新宮

青衾神社

鈴御前社

末社

右八百萬神祠　蒜祠

稲荷祠　浅間祠　土為祠　神御前祠

乙子祠　今宮　左八百萬神祠　二名新宮　賀茂祠　龍田祠　周天神祠

一御前祠　土神祠　山神祠　目神祠　金神祠　龍神祠　唐松祠

御井祠　姉子祠　今老祠　水向祠　素盞烏祠　日長祠　山王祠

姉子祠　今老祠　水向祠　素盞烏祠　日長祠

外天神祠　白衾祠　新氷上祠

天岩戸事祠　松姫祠

寢覺里

松風里

贄田年中祭事

夜寒里

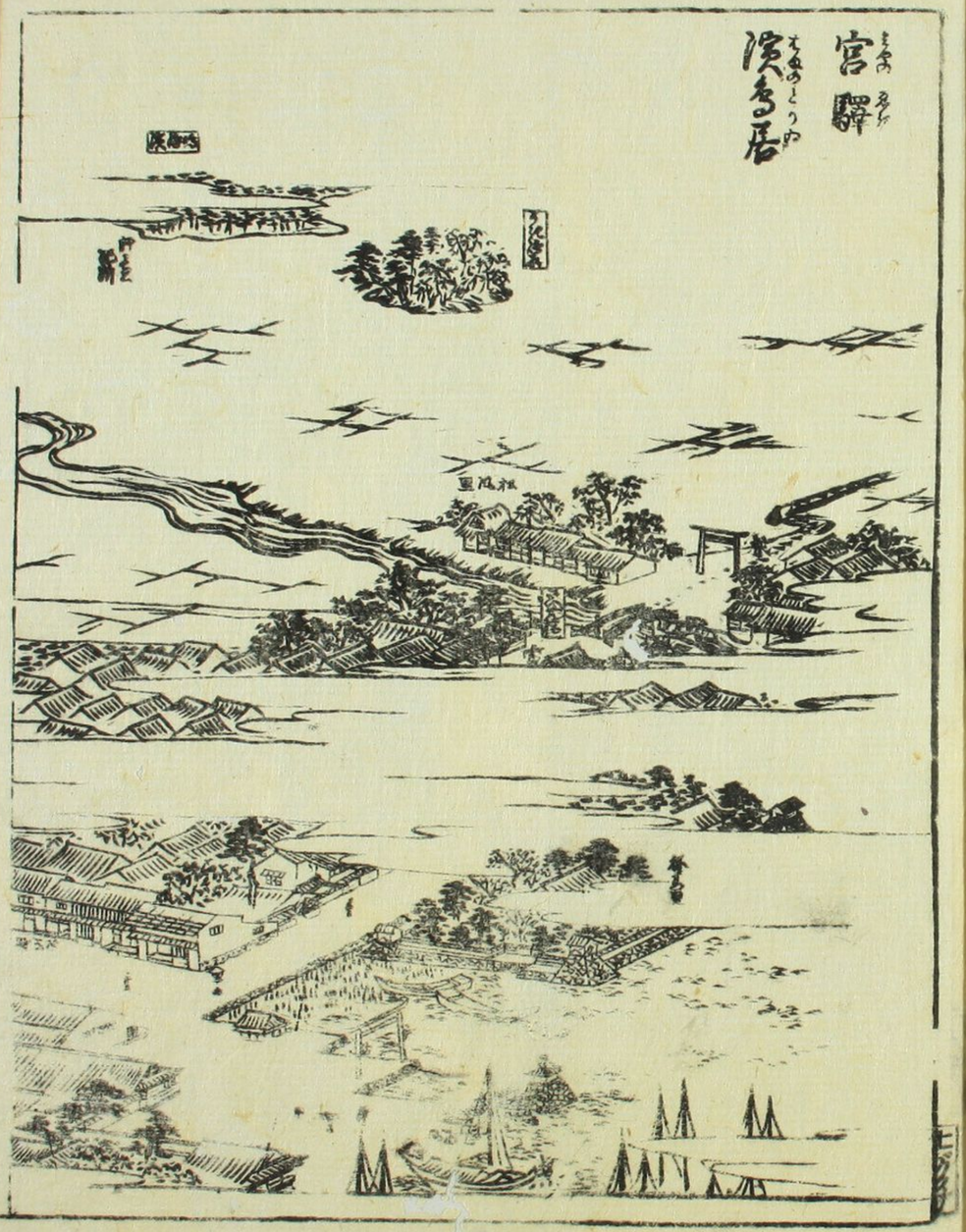
呼瀆濱

毛知濱

常磐舍藏書印

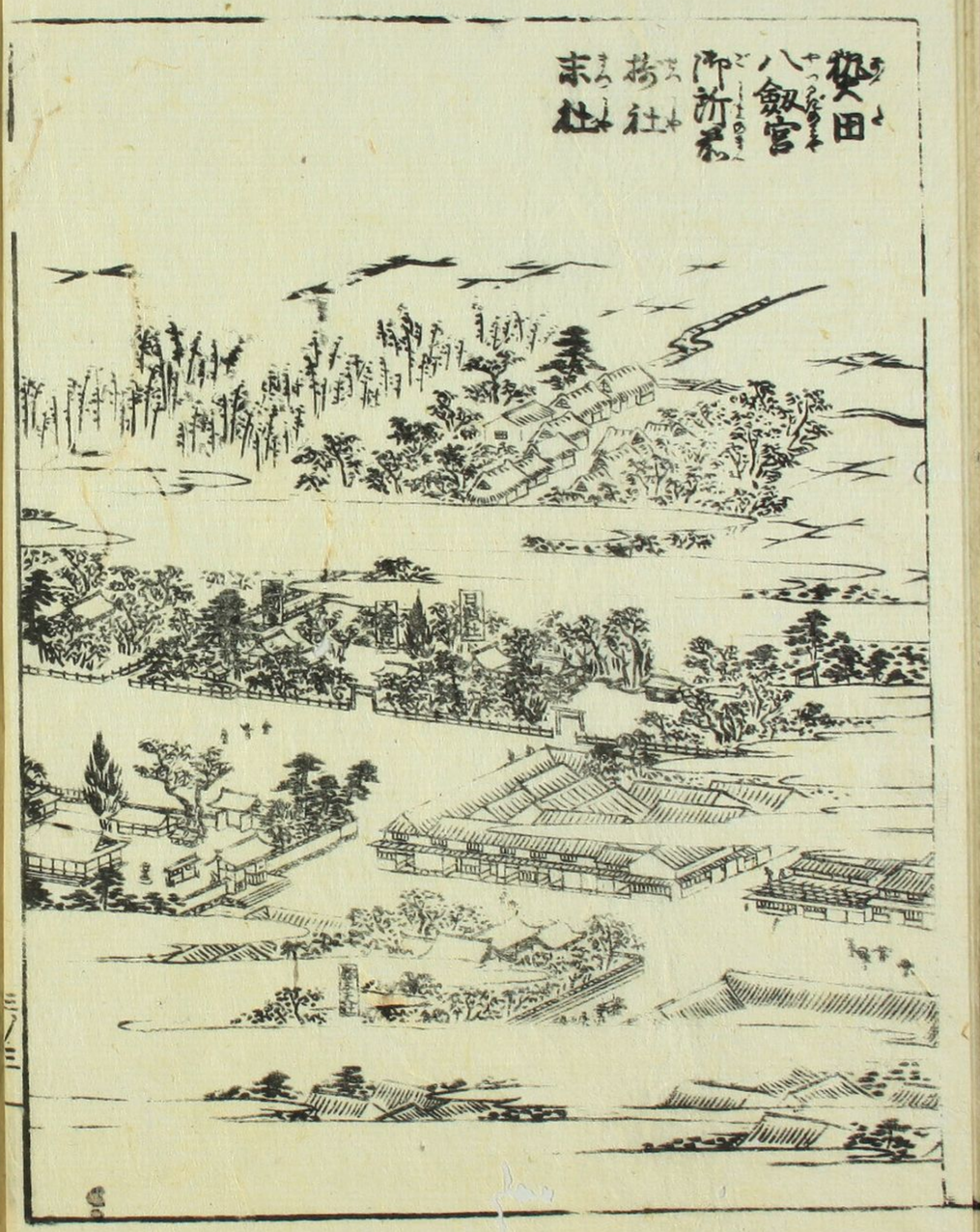
藤原師長公配所　櫻田　笠寺　星嵜
○鳴海　鳴海上聖　鳴海寺　鳴海神社
芭蕉翁千鳥家　同笈文庫　衣の浦　音聞山
名産有松綾　今川義元塚　子人塚　堺川　尾三両國堺　○沈鯉鮒
知立神社　多宝塔　除蝮蛇神札　古額　末社　神離門　神宝古能面　石橋　芭蕉　八橋　的場
沈鯉鮒馬市　八橋古蹟　橋雲寺　無量寺
狭投神社　矢矧宿　浄瑠璃姫墳　矢矧川
矢矯橋　○岡嵜　大樹寺　魄場聖　子人塚　大屋川
小豆阪　二村山　六乃里　○藤川
山中里　宮地山　法藏寺　○赤阪
○御油　本坂越　二見道　本社原　御津神社
兎足神社　山本勘介故居　砥鹿神社　○吉田
豊川　牛頭天王　六月例祭式　放花炮　煙巖山

鳳來寺　本堂　三層塔　昆沙門天　樓門　勝岳院　行者歸　神祖御宮　鏡堂　一王子　名跡題目石　瑠璃山　猿橋　鎮守権現　八幡宮　二王子　八王子　隱水　篠谷　獲法神　伊勢兩宮　荒神祠　妙法龍　高坐石　山伏堂　常行堂　辨財天　人師堂　奥院　坐女石　馬背
天神祠　鐘樓　一本杉　尼行道　牛鼻　石卷神社　窟觀音　○二川
堺川　三遠両國堺　猿馬場　○白須賀　白菅湊
汐見坂　富士見松　高師山　橋本
女谷　風爐井　角避彦神社　紅葉寺
濱名川　濱名橋蹟　○荒井　猪鼻湖神社
源左山　濱名湖　今切　舘山寺
引佐細江　○舞阪　馬郡觀音　音羽松
若林二ツ堂　賀茂祠　鴨江寺　○濱松
引馬野　諏訪社　五社明神　三方原
犀ヶ崖　大安寺　龍禅寺　颯々松

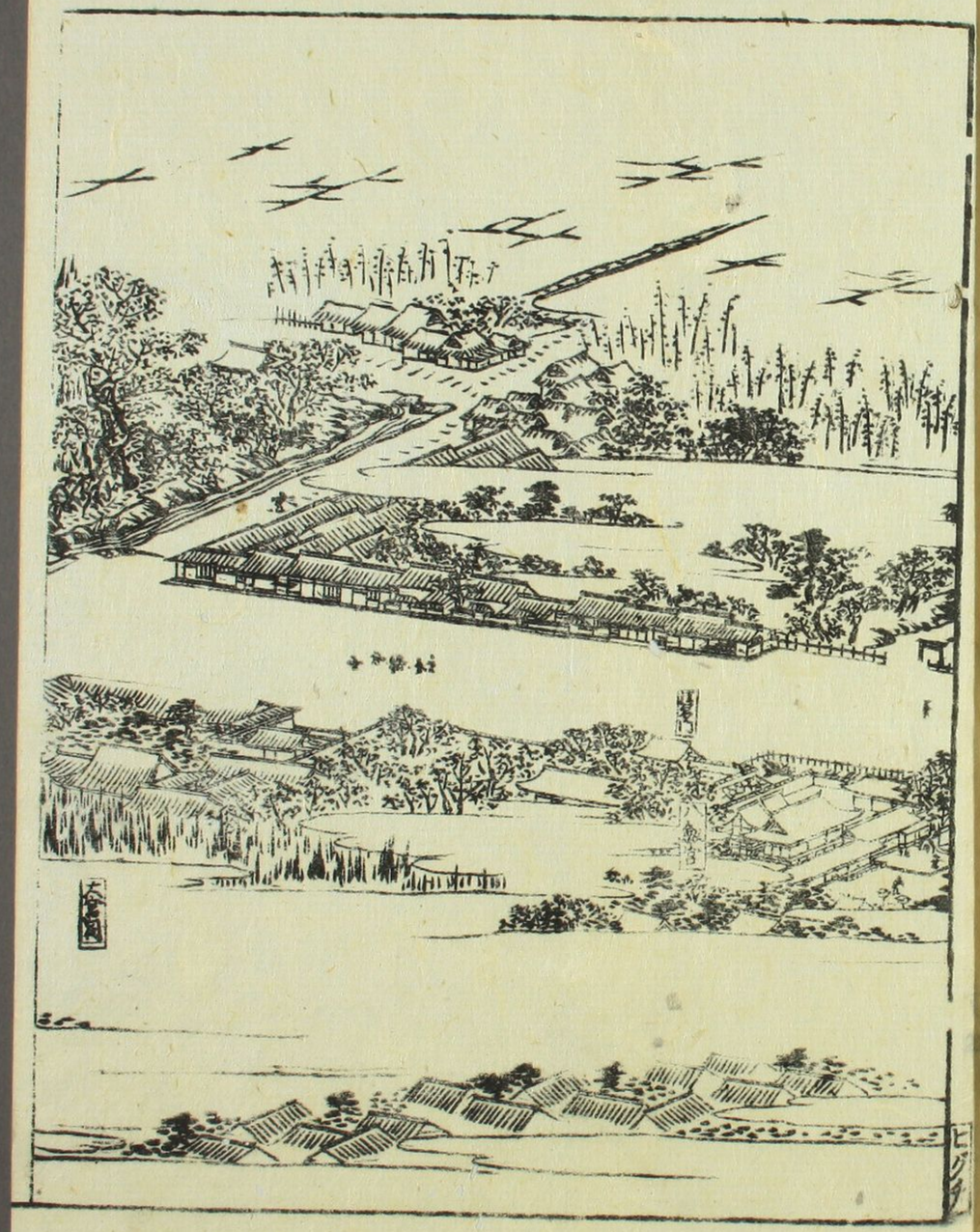


頭陀寺
植松原
蒲神明
茅場
東江戸行程同里
天竜川
沈田者
熊野古蹟
熊野墓
老母墓
中泉
八幡宮
朝顔墓
三香登橋
今之浦
○見附
妙星寺
熊登祠
○袋井
名産花莚
腹川青川
志呂波儀

東海道名所圖會卷之三目錄 終

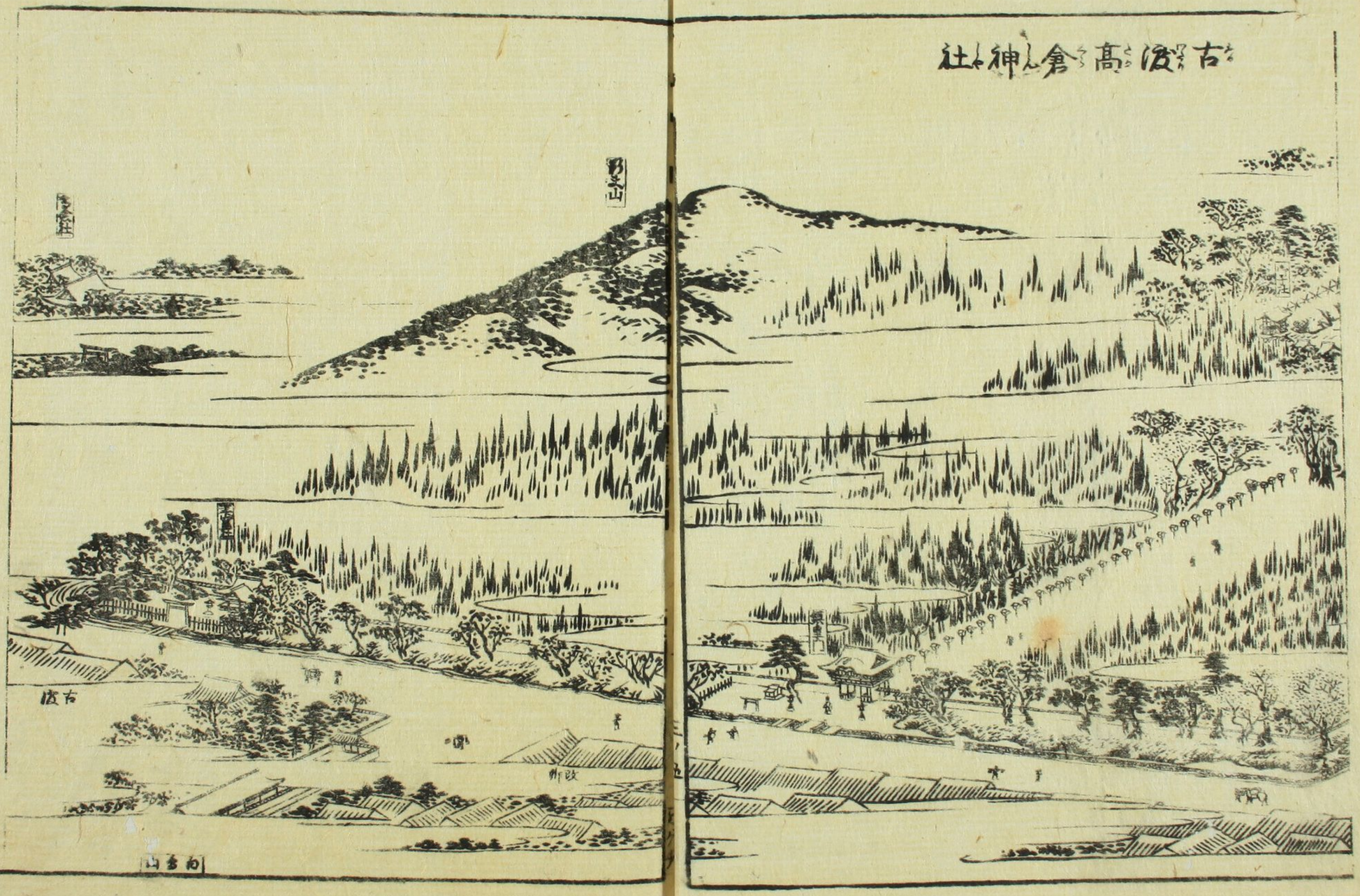


樊田
八劔宮
御所
樹社
末社






誉田
大宮
正殿
上用殿


古波高倉神社
古波
改郷

熱田宮の異訓にや海驛まそ里半許にあり領主の監舩所あり同海莊等あり
渡舩さはにあり
岐蘇街道より名護屋へ十四里
古渡 佐屋海道岩塚より熱田まで三里半
熱田宮と云ふ
富士見
都人雖欲尋古昔之跡
一鳥居 古渡の南にあり八幡を造る丹塗二鳥居一の南に
尾張國年魚市郡と書也
熱田大神宮 延喜式神名帳曰熱田神社 名西
日本武尊 御歌二首
奈良平美也 禮波止保志比多加知尓
已乃由不志保尓和多良比加毛
阿由知何多比弥古許弥阿波例
止許留良牟也阿称古乎
寛平中尾張宇村相記出
○正殿 大宮と称も祭神五座西の方にて座上とも
第壹間 天照大神
第二間 日本武尊
第三間 建稲種命 宮簀媛命所兄尾張姓熱田神宮大宮司の祖神なり
第四間 宮簀媛命 日本武尊皇妃
第二間 素盞烏尊
第五間 八劔神社 大宮の南寺町許西の方南向坐祭神十座
東の方なり〳〵座上より
(式内)八劔神社 大宮の南寺町許西の方南向坐祭神十座
(式内)高藏神社 大宮より北の方五町許畑村にあり神名帳云高座結御子神社 名神大
(式内)日破神社 祭神仲哀天皇
(式内)氷上神社 門前町にあり神名帳云日割御子神社 名神大
(式内)大福田社 當國知多郡大高郷にあり神名帳云愛知郡火上坐御子神社
門前町日破社の祭神正哉吾勝尊
(式内)源太夫神社 傳馬町にあり神名帳云上知我麻神社
祭神尾張姓十一世孫止世乃命 社内に豊子大連の社あり
(式内)紀氏神社 大宮西面鎮皇門の北にあり神名帳云下知我麻神社
祭神眞敷刀媛命 此所の北名を鎮綾と云
(式内)孫若神社 鎮皇門の内にあり神名帳云孫若御子神社
祭神瓊々杵尊

○土用殿 正殿の東北の方にあり檜細工
神躰 草薙寶劔 日本紀曰素盞烏尊乃以蛇韓之劔斬頭斬腹斬尾之時劔少缺故裂尾而看即別有劔此劔昔在素盞烏尊許今在尾張國也
同紀曰景行天皇五十一年秋八月日本武尊所佩草薙横刀是今在尾張國年魚市郡熱田社也
別宮 攝社 大内にあり延喜式神名帳出

(式内)寶田神社 同所にあり神名帳云御田神社
祭神保食命 稚産霊命
南新宮 大福田社の小くにあり祭神天照大神 素盞嗚尊
側ふ級盛弥五郎祠あり
(式内)青衾神社 南面石鳥居あり祭神名帳云青衾鉾社
社の渡よ名泉湧り
鈴御前社 傳馬町ふあり
祭神天鈿女命
末社 右八百萬神祠。縞荷祠。王若祠。蘇祠。後閻祠。横河祠。
乙子祠。今宮。已上大宮の西の方よあり
左八百萬神祠。二名新宮。賀茂祠。龍田祠。内天神祠。已上い
大宮の東の方よあり
一之御前祠。土神祠。山神祠。自神祠。金神祠。龍神祠。
清水祠。御井祠。已上い大宮の後ふあり
姉子祠。今宮祠。水向祠。素盞烏祠。日長祠。已上い海藏門
の外神幸通ふあり
山王祠。姉子祠。今宮祠。外向祠。素盞烏祠。日長祠。已上い
海藏門の外東側よあり白倉祠。新氷上祠。天岩戸事祠い
外天神祠い德皇門の外よあり松姫祠い布曝女町ふあり
又宮の神三十餘ふあり一書云其外末社所々ふ多し
駒を走らせまゐりて今日早旅名日あけされ杜の下陰 泰議雅経
十六夜日記
此日尾張國あつたといふもりよ入りぬるやを行よれぬるれば
宮へまいりて祝ともりいそぐ書はあくる
行る我よ家あとふこと此海こかくなつも秋の海にく 右衛
光明紀り
尾張の國熱田の宮ふいでうり神垣れわうちうけ宮くまいりて拜と
なるふ本立やう一ぬり半ば欠森の木ぬ苔ふり名日ぬけ半くさーりて
凡ふ礼れうることからねよふれくく神さびするうあとそふされむれ
救もこくに本まよ来ぬこと感ぎのほとまうふんくくこかーり白ふねら
書ぬまくにこいまり回くぬ変も仏すごく安の或人の云此宮ふ素盞嗚
尊ふ初て出雲の國ふ宮作り有ける大和言葉ふ
是よりそはじまれる其ふ後景行天皇乱代まのみそうふあるふ祝れ
のりとのつり又三ヶ宮ぬ奉幣ふ茶ふさとやまる神級く景行の御子
日本武尊とう夷をたいらげくく帰りのふ時熱田ふこもり給ふとと夷
一條院ぬ御時大江正采とふ博士ありけり長保のまふ尚て當國ぬ守ぬ
りたりけるふ大般若を書くく此宮ふて供養とこげりける

願文に吾願まそにみちぬ任限又こちたり古々へ帰らんとする勅
いまだいへどくなるゝ事を書るまゝ我あれにまゝ所にそく安かれ
おもひおもなくてや念へかし法のかゝこと書むけをかまは

古語拾遺云草薙神劔者亡是天璽自日本武尊
體旋之年留在尾張國熱田社外賊偸逃不能
出境神物霊驗以此可觀然則奉幣之日可同
致敬而久代闕如不脩其禮所遺一也

元元集云草薙劔此今在尾張國吾湯市村 私云
今愛知郡是即熱田税部所掌之神是也

東鑑曰建久元年十月右武衛頼朝上洛之時同
廿七日御潔齊令奉幣熱田社當社依為外戚
祖神殊被致中心之崇敬云云

神皇正統紀云

日本武尊は信濃より尾張に出るゝかの國に宮簀媛と云女を尾張の
稲種の宿祢の妹之此女をめして淹留ゆゑ一あいこ十菅の山に
荒神あまと安へ者をは劔をは宮簀媛乃家にとゞ先て徒よりそ
まま山神化して小蛇になりて御道に横たはれり尊又まへて通ゆゑしに
山神毒氣を吐るに御心見ざれにたりそまとり伊勢にうつりゆゑに能慶
野と云所にて御病をなりてしく歌よりれば武尊命をして天皇に
事のよしを奏して終に歌ひ御年三十なり天皇をまし石て
悲しこゆゑに事は限なし群々百寮に御覧せて伊勢國能慶堂に於さめ
なられしに白鳥となりて大倭の國にさして彈琴原に留れり其所に
又陵を作さめられ名をば又飛ぐ河内の古市にとゞまる其所に陵を定られ
しかど又飛く天に登りぬ依る三の陵ありかの草薙の劔は宮簀
媛あが先なり尾張にとゞまりゆゑ

足利義教公富士見下向の時釋堯孝紀行

熱田の宮乃神ゆゑにまうでて御道まがらの御祈をなし侍りきむかし
日本武尊東夷征伐の為にまのさかひに越きゆゑし時に御道し
伊勢大神宮にして大和姫命に御かりゆゑしに命のさづけゆゑし
志劔も此神殿に止らせおもしまれとうやいとゆんことなる我神明
鎮護國家のちかひもものかしくお用え侍りて
なれめんをあつこの天祥の門とゆまさ旅のゆきを 堯孝

あつまひの某樂於多紀一秋の彩ありて光代のそのもろもろ
（蓋葉の誤をとりて）
君のたも老せぬみもり有といくかや蓬が落あがりせん　同

拾れ當社い人皇十二代の帝　景行天皇社御時ら御鎮座一ゐ給ふ歟ら
天智天皇の御宇故有ゝ皇都へ遷一なる十九年な歷て　天武天皇朱鳥
元年ふ再びもとの所へ還座一ゐ給ふ其砌ハ勅使例祭ふ立ゆて官幣を奉らせ
なる事其餘凡今ふあり中古奉幣使怠りゐふを忌部廣成ゐれを嘆て古語拾
遺ふ書ゝ遺ゐ先社頭の嚴ゐる事いふ八境小栗社ゐ居大宮八數神社源をまり
社を初め拾社末社ゐ数く石ゐ高橋下馬の石居南面の門を海藏門といふゐ
神幸道とゐふ門の内ゐ不實梅内の天神祠あり里老ふ菅原の云宗皇帝四百
餘州を治給ひ日本於取んとて計ゐふを當社の御神をろ一めて仮ふ楊貴妃
と現れ世を乱一ゐ給ふそれで日本をとる事叶ひ貴妃い馬嵬ゐ於て高力士
ゐ為ふ空一くゐ一ゐらる一ゐ玉宝別れをおゝみ方士楊通幽とゐ者ハ四方へつゐ
一てそ魂魄を尋られ一ふ日本蓬莱山ふおゝ一ゐて當社い乃来り
一とゐふ則ち内天神とゐ楊貴妃ゐ霊ハ給ふこそゐ事古く世ゐ人ゐ日ふ膾炙も
社號ゐ聞え侍一ゐ然られと仙傳拾遺を引く暁風集ゐも一ゐ事を載ゐう
又東海瓊華集ゐ秦ゐ徐市始皇の詔を奉て不死ゐ薬ゐ求んとて日本へ渡も
ゐ為ふ熟田神祠ゐれ蓼茅宮と記一壹和傳正ゐ熟田ゐ栗ふ綱福と聞詔を奉て
維摩會ゐ講師と成惟蓮沙門ゐ七母ゐ骨を高野山ふ藏ゐんとて東國へ登り ゐ
神祠ふ立ゐる神人ゐ骨の活様を忌て宿ゐ辞ゐ漸ゝ外ふ草庵ゐ其夜神宮ふ参
ゐ告ありて神勅ふ従ひ惟蓮を琢襲一ゐ給ふ一ゐ
羅國の沙門道行ゐ草薙ゐ寶劔の霊威を聞て神殿ふ入續經一百日一ゐ籠ゐ
竊ふ寶劔ゐ盗取ゐ僧伽梨ふ裹ゐ護持一て筑紫ふ至り本國ふ歸ゐ時
忽ふ海風暴起ゐて湧ゐ雲ゐ船ゐ墨雲一帶ゐて劔ゐ奪ゐ去ゐ事ゐ
元のゐく神祠ふ藏ゐ又治承の兵火ゐ免ゐ事ゐ
さまゝゝゐふ時當宮ふ治一琵琶ゐ彈一ゐて明神感應ありて寶殿
震動ゐり一ゐ平家物語ゐも載ゐう公亜感應験奉て貴ゝ

かぐら殿。両神殿。礼拝所。渡殿。釣殿。祭文殿。田扉。拝殿。勅使殿。透。籠。左右の楽所。神楽所。神輿舎。神庫。橋部屋。社頭ふ石。礼。大燈爐あり。銘ふ曰

慶田大神宮御寶前奉奇進石燈籠寛永七庚午稔正月佐久間大学亮平勝之と鐫。ま其高ゟ尺八寸許　末師東山南禅寺ふ同銘の大燈爐ありふれふ一對の大器し

益の旦五尺許　神馬ふ尾陽産ふ酷ぜらるゝ之

西ふ鎮白玉門東ふ春敲門外の御厩あり櫪飼の神馬弘毅ふうれ

其外政所。御饌殿。大業師堂ふ當社礼神宮寺し　本尊ふ某師併ふ安亜礼慶田神の本地併ふとぞ

側ふ不動堂あり　八劔の神礼　本地仏とぞ　又其側ふ愛染堂あり大宮の流を雲見山と

いふさゝ丘御幷の清水あり玉幷里礼古迹ふ玉礼斜ありまをうれ松岡祠あり

乾の方ふ鶯宮山あり土人断走山と是釜茱山礼蒼蹟し礼ふ

ゟ称ふ。又御前の中程あり西の方ふ白ふ山あり

案紙ふ方角拙ふをんくうり拙ふ思ふ

おれ日本武尊の陵し菖蒲沈い旗綾町ふあり蒲冠者範頼礼誅礼ふ所し

故ふ蒲礼ゟあり頼朝つもまゝ礼て出誕一ゆふ御母い熟田の大宮司の女と

端書ようんくうり御正お町ふ中礼森清宮門京清茅の風洞の辻東礼門外ふ之

本松あり高蔵社の側小鉾取洞水神洞新宮あり此社頭礼石を携ふく旅

立まるふ恙ゟ一ゆ路ふい信して及一礼ふる風俗し柿南社ふ熟田と跡ふる事

い草薙寶劔を栗礼枝ふ夏亜ゆふ狭々光あり例の杉の梢ふ光燃上りく

故ふ蒲礼ゟあり頼朝つもまゝ礼て出誕一ゆふ御母い熟田の大宮司の女と

其下礼田ふ焼倒れ田も熟りゟれで社の名ふ水とも又御神領ふ

玉葉　橘花ちりぬんのちれゝと見ふい松ふかくれる袖をまのもん

あれい熟田大明神礼御ふとん亜一かの社礼大宮司尾張姓代々ゟ事也

久ふ尾張貞職ふ女の名を松とゆふる藤原季兼ふ玉くりく

季範況うり久渡大神ふく祝宣せさ勢ゆひるふうり季範初て大宮

司ふ成其末今ふたえぞとるん王葉集ふもんくうされでむしも今も示現利

生礼垂迹ふ玉ぞまりそて一心再拝礼御ふ頭を傾くれで春の花礼匂ひ

鮮ゟるごゝく秋の月礼清風ふ澄ゝて久の音神楽礼奇伯人い法晴を

祝ゟ礼間断ゟく神燈い社の法ふ燈を四時の供菜ゟ尽ゟ是みる

平天下礼御護叡ゟて東海東山ゟ道貴一の垂社ぞゟられる

正月十一日
踏歌神事





浪花春泉齋画

○正月元旦又朝 大宮八劔宮 大宮司奉幣

○同日朝 内院供御 八劔宮ふだ先にて大宮ふもとの内陣外陣の供御毎事同じ 二月祈年祭 二祭ハ大宮司ばかりにて八劔宮小神樂 供御調進の中ハ毎事同じ 祈祝詞有て祈年祭ハ穀豊饒を祈る 神樂あり 祝詞ハ毎事同じ 社中一統ふもとに集りて内外の餝あり 社中一統ふもとに集りて同日神事 散実の

○同日未刻 外院供御 八劔宮ふだ先にて大宮ふもとの内陣外陣の供御毎事同じ 二月祈年祭 二祭ハ大宮司ばかりにて八劔宮小神樂 供御調進の中ハ毎事同じ 祈祝詞有て祈年祭ハ穀豊饒を祈る 神樂あり 祝詞ハ毎事同じ 社中一統ふもとに集りて内外の餝あり 社中一統ふもとに集りて同日神事 散実の

○同日晩 上千寵神社ふだ 櫻式ハ一器之 一日晩 八劔宮の行ひ 三日晩 松姫宮の行ひ これハ五社のおこひ 其儀式男女の雛形を飾 薬歌うど

四日晩 日割宮の行ひ 五日晩 南新宮の行ひ これハ五社のおこひ 其儀式男女の雛形を飾 薬歌うど

持一ツ酒飯を備く 夜頭あり

○二日朝 外院供御 大宮ふもとに同じ

○五日朝 外院供御 大宮ふもとに同じ 千寵神の宮作ハ放て初市の還風あり 演の狂くり社中上下の装束 御福迄とのふ〳〵群参ま 祝の種々のしなもの有事也

○同日晩 大福田宮へ陪従十人参て十一日晴歌の調あり 十日まで毎夕也

○七日朝 外院供御 大宮ふもとに同じ 七社の御供御

○同日晩 大福田宮の神殿ふかく合水の桶あり 新年正月十二日甕ふ水と入て堅く封じ大宮正殿の下ふ埋ミ置〳〵今此甕ふ封持参り予ハ本祝 あて水の減おぎなふよて 今年の豊凶ハ此水にて知るなり

○十二日 踏歌神事 大福田社より始て祝部 大宮 八劔宮 又大福田社へ 神事ハ人十二人高巾子 吹祝神頭ハ竹川ふ殿油みとり 持つゞき翁あり 三人猫そノ陪そノ 梅山 至る大宮司出仕 音楽あり 八劔宮祈れハ大福田宮ふ 廳屋ふおゐて 薹業餝弄ふ合水を 甕ふ入封を

○十三日 お射初 六人の射手角的ふ 海藏門の前ふて引

○十五日朝 外院供御 雨宮例の如

○同日午刻 お射的 六人の射手丸の大的を 親式穀を射 射場ハ海藏門より石橋まての間 石とお合せる故実あり 今ハ絶

○九二日 雨宮お射會 社中會合して明年の神役を定め 歩射ハ歩射の神役を定め 其後自格の祭役を定也

○二月初巳午未日 祈年祭 初巳日夜亥刻 大宮大小神祇を祭る供御 御進後廂あり

○同午日未刻 高藏宮 日割宮 大福田宮 永上宮 孫宮 其外諸社供御 翌日撤之

○同夜酉刻 八劔宮大供御 翌日撤之



○二月初未日午剋

御田神社供御 兼て鳥啗之事 俗に鳥祭といふ事は神事にて
前に祝座長外に壹人平餘とも鳥を見せ此餘は鳥の啗ざる
ゆゑなり此神事を始めしこれにより御饌所にて七日已前より御饌所にて
餌飼し侍る也次に東西六社合て十二社の祭祀をしまひ祭といふ
年災起らば時令順度なるしめん為め神祭をいふ人尾張の國司
國幣を奉られし餘風にして己の夜は供御より未の日御田の祭
至るまで故実多し 口傳ありしとぞ

○三月二日朝

八劔宮内院供御 草餘 桃花 神酒

○同 三日朝

大宮内院供御 草餘 桃花 神酒

○四月八日 神事 郷代頭人補代頭人より大宮拜座勅使殿へ
造り物を出し酒揃あり

○五月朔日朝

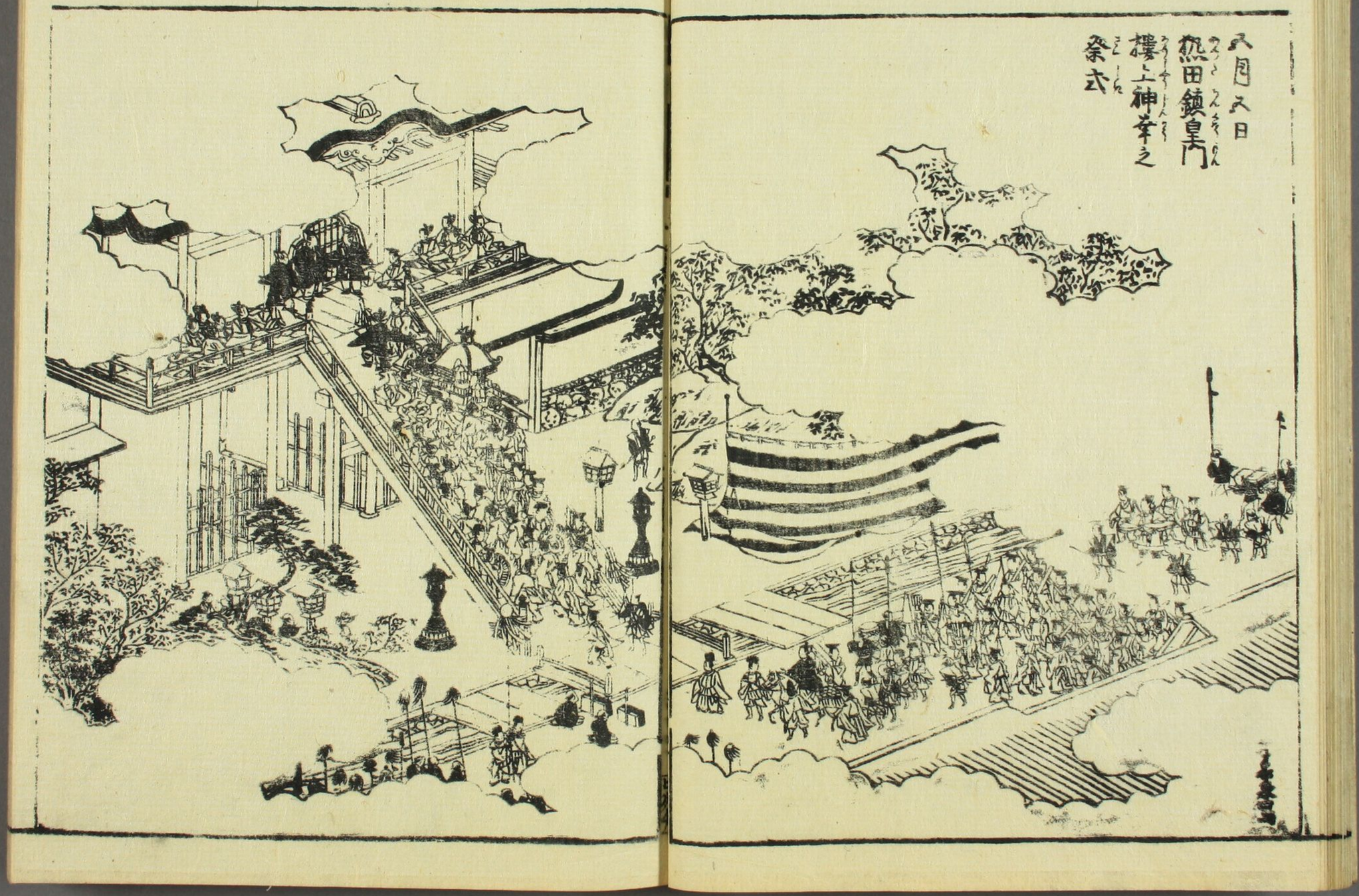
外院供御 兩宮例の如し

○同 四日未刻

八劔宮内院供御 翌日撤之 諸社に菖蒲を葺
此日午刻 郷代頭人補代頭人七社に奉幣あり
七社とは所謂 大宮 八劔宮 高藏宮 日割宮
源左丈神 氷上宮 大福田宮也

○同日夜

政所大宮 八劔宮 清季門にあつて會影堂といふ事あり
樂人出しこれをはとむ故実ありとぞ


八月八日
熱田鎮皇門
樓上神幸之
祭式

○五月五日朝　大宮内院供御　例祭の由緒は、景行天皇四十三年の
○同日未刻　神幸鎮座白玉門樓上御幸時、高社小河鎮座ゐり天智天皇の時改めて遷座
皇都水亀を祭り討力平成為めに天武天皇祭るこれ亦千古の例祭なり、
なり、是時記有て宮幣被捧ぐる事、毎年四月より至り勅使代補代の衣頭へ
あるべし、卿代、宮幣帛の正使、祭主卿補の衣頭へ副使をつとめ、
社司右座の競べ山自然御所へ参じ頭人馬頭人の三人若の馬場乗あり行粧嚴重
有て衣頭人馬頭人神幸故実の約事多し、神供堂所の湯
海藏門より入神幸の儀上八社へ供を献ず、神供堂の神事も毛後の衣人等
三所人七社へ供を献ず、神供堂の神事も毛後の衣人等
神饌御遷座を拝ぐる故実と云ふ、
紙文字ありと云ふ、

○六月五日朝　南新宮供御　祇師祇園あり　熱の毎女
○同日巳刻　山鉾祭禮　八劔宮　南新宮　大宮等の神輿渡御あり車ハ
小童数多装束して綱を引く、山上二股より人形を出してはうふ終ありと云ふ
舞ひ大山より上二股より人形を出してはうふ終ありと云ふ
甚だ大山より上二股より人形を出してはうふ終ありと云ふ
○同日晦日　鈴の宮社前川原にて裏祓　社中一統歩して祓所へ参る、其の輪と
川の芽の形より向祓等を付　錫杖を付　錫杖を付　錫杖を付
祓川にて祓ひ神輿を祓所へ渡し奉る、祓所にて神輿を祓ひ奉る、
祓川にて祓ひ神輿を祓所へ渡し奉る、祓所にて神輿を祓ひ奉る、

○七月三日　大宮大掃除　其外諸社共毛の出てとつとも
○六日朝　八劔宮内院供御
○七日朝　大宮内院供御　調進　神實生干
○八月朔日　兩宮外院供御　八劔宮内院供御
○同八日朝　大宮内院供御　迎神の勅願よりそ　神輿渡御
して將門滅ぶとぞ　大福田の神を河藤所　大福田宮　仏神事
○九月八日未の刻　神幸　秉燭星奇小雨　其神輿
○九日朝　八劔宮内院供御　菊花粥
○十一月初酉卯辰日　新嘗祭　○寅の夜子刻　大宮大供御　○卯日未刻
氷上宮　源太夫神　大福田宮　其外諸社供御　高藏宮　日吉宮
八劔宮大供御　○辰日午刻　河田神社供御　奏禽十羽次ぶ
十二社祭　新嘗会の新穀祭　二月ぶ御神事　○巳の刻　大宮八劔宮　大供御
大宮内院神事二番あり　○十二月九五日　兩宮外院供御　又燎拂　御神頭人大宮籠所ぶ寒中立春まで
毎夜篝る儀式あり

○鳥喰の事は當社のことにもあらじ予往年藝州嚴嶋明神一階を其時宮湾七浦七瀬を巡拜をしれを湾廻りといふ宮湾の
めぐり海上七里の船にて擬社をめぐる之其中にて者三者四れ
石にて神宮税詞喜樂の奏し神供を海上へ浮め調進を其時
頭の白紙烏二羽來りて供所の喰へかの擬社に侍ふ神人云
此鳥を紀の熊野山より來りて宮湾の山頂弥山に棲す何にても
湾廻あれば其に鳥來り神供の調進を見此鳥來らざる時は
不浄汚穢なりとて船を行へ戻を法例にしとぞ予おれとめぐり
れれば鳥一羽忽然こうして鳥來り神供をしれば日の撰まれ
ハ川にてもかくの通りにそれより七浦をこうぐくめぐりて本社
嚴湾神前へ着船して左々湾神樂あり又神宮の家にて
饗の給ひ山海の珍味と料理し大に饗應をしれば夜
戻り蛇子といふ其夜宮湾の庄頭遊女なし來りて夜を
諷ひ神酒をもりて夜に浮れ
○熊田の例祭正月二月十一月の神事に荳津村阿波の社の香物
神供とは此れは阿波の神社の菽の中に甕を置て瓜茄大根の
初生とは此に漬物とし年々鬢髭を納れ神に本綿附て持來り
神供とは諸に菽に香物とは此謂にとぞ事は前巻に見へたり
○熊田七社といふは大宮八鍬宮高藏宮大福田宮日割宮
氷上宮源左ま宮之其外攝社末社一百餘座記する繁多なれば之に畧ス

雲見山 熊田大宮の後の
森より

秋さひくいや新高の松杉に雲見る山は秀出ぬらん　刑ア少輔 平雅連

秋寒里 春敵門の北の森の
ほとり成いふ

ましし吹秋寒の里の稱覺にはいとく人を惑しかりなれ　前右兵衛督 顕仲

まま
同

儲とりに鳴かはしたるさりくまとゆむの里の菓の樹平　仲實朝臣

安まくにかなし吹をふ秋とくや秋寒の里の夜うけ殘ん　式乾門院 御匣

玉升里 本宮のうしろに
ほとる所といふ

藻塩

夕立の一むらゆる菓の菓に墨白露の玉の升乃ゆを　僕人云ふ

泪川 清雲門のおの浴水をいふ
原見菓に出又同名伊勢にあり

なこそ川名の所上の所為ゆれば阿波の社の事にしたり　僕人云ふ

中の杜 清雲門のおとり
いふとなり

家集

尾張にかりしに熱田の宮に住て清雲門にて愛いふ鳴鳥をこへ中の杜とかん云ふ

鶯の聲まるほとはいそかれく海とる中のとりといへども　赤染清門

弥山 鷲峯山の
いふとなり

新六帖

郭公をのう弥山の推柴にかへりこまりや　吉伝もせぬ　僕頼朝臣

名宗

はまそ行弥山もしらぬ白雪の時さのとうの身の奥の　同

履覺里 宮驛濱の鳥居の事にて
一説 吳法國

風のさそふおやまのくれてわびしもおう秋の里ふあらうつ　伊勢大輔

古今六帖

おつま湯の松風の里に初秋の夜ふけ行ば琴の音ふ聞つ

海くれて眺の里の夢路のふ風　躬恒

松風里　終宮のやうに

名所　大名高

松風の里ふむれのふ残いる中ともさぬる心化そまれ　定家

呼續濱　樂出町の西ふ

歌枕　擣衣　名所　寛平御時后宮歌合

年六月十二日　相州小田原陣中ふ於て堀尾金助討死せし　追福の為よひ

海ふ入る三河の国ふ八橋ふ法名ふ記せり　川を

渡りよ古松四五本あり土人　渡守へ

新拾遺

哀知渡　名所

おいさやいふ名のうらふも偽ふ宮もりうるみの

万

おのち渡汝ふ染ふしふ知ふ名れ浦ふ納こく毋ふ沖まるみの　藤人丸

藤原師長公配所　愛知郡井戸田村旧蹟ふあり　龍泉寺という禅

平治盛のとき左遷せられ又西洗法師の子加賀ち師高國宮せられて山井戸田へ

流され山國の住人小胡摩の郷司繼季ふ仰て討せり　平治物語ふくわし

大政大臣師長ハ司ふ停ら東の方へ流され中ふ去保元ふ父惡左府殿の

縁座ふよつて兄弟四人流罪せられひさ師兄右大將兼長衛府左中將隆長

範長禪師ニ人ふ陽治ふ待ひて配所ふく給ふ来ひ又ハ大臣ふ土佐畑そ

九還されふ秋を送り迎へ長寛二年八月ふ召還されて本位復一次の年

正二位ふーそに安元年十月ふ薨中納言より権大納言ふ上らのふ折節大納言

不明ふれ公負の外ふそ加られる大納言ハ成る事是始之又ふ中納言より権

大納言ふ上る事も後山階大臣朝守公ハ治承ふ納言後國司の外ふハれ初ふそ承る

管弦の道ふ通下才藝ふ勝ら坐ふれハ次ふ昇進滞らず大政大臣ふまで窮ふせ

ひて又いふる罪の報ふや宝ひて流れのち八ん保元の丑日ふ南海土佐へ遷され

治承ハ今ハ又東関尾張國ふ移ら末罪ふくして配所ふ廿月を見んとふ事ふ

ふある際の人の預ふ事ふ彼唐太宗ハ貞観ふ白樂天海

陽ハ江のそとふ徘徊久ふ其ふあーをふふり馬海浜汐路そるふ遠見ーて

常ハ朗月を望ふ琵琶を弾和ふ詠ひて笑閑ふてふふ月日を送りのひくり

或時為國第三の宮熱田明神に參詣ありて其後神明法樂に為に琵琶彈朗詠しなふに其所本來無智の境なれば情なかれる者なし邑老村女漁人聖叟頭を低れ耳を聳といへども更に清濁を分て呂律を知事なしされども胡巴琴を弾せしかば魚鱗躍迸虞公歌を發せしかば梁塵動搖く抱れ妙を窮る時には自然に感を催す理なれば諸人身の毛竪く海座奇異のおもひをなす漸深更に及んで諸香調の内には花芬馥の気を含む流泉の曲の間には月清明の光を爭ふ願は今生世俗文字の業狂言綺語の謬を以て といふ朗詠をして秘曲を弾ひしかば神明感應に堪ずして寶殿大に震動す平家の惡行なりせば今此瑞相をば爭ひむへきやとく大に感激をぞ流されける

櫻田

万葉

東海道宮より此海までのるに山崎村戸部村あり其北にありて櫻村といふ

櫻田へ田鶴鳴ひてるなはちくさはひにはらしたりけりてる

高市連黒人

六帖

山風の色ふきなりすさくら田の苗代あを花にせきはく

光明峯寺入道

笠寺



三林山笠覆寺

尾州星嵜庄笠ち村にあり
真言宗笠寺といふ

本尊十一面観音

開基吾光上人他長六尺境内に茉師堂護广堂地蔵堂
祖師堂多宝塔鎮守白山祠池中に多天祠あり
寺記云 高山むかし 聖武帝の御宇吾光上人霊木に感得しまひ熱田明神の神勅
に得て此本尊に彫刻しまひ初は小松ちと号し勅願所なり
然るに星霜累りて中古云火の為に諸堂滅び霊像は空しく曠野なり
殘りて道路の涯に立ちまふさて鳴海の長者が侍女に美艶の者あり
殊に大悲を尊信してさゝに歩に運ぶ事数月にある時一村夜来りて
霊像忽而水に浸れかの侍女さいれを悲しみづから被く蓋の笠に
着せまいらせたり其後都より昭宣公の嫡男中将兼平卿吾妻の方
下向しまふ時かの女道のかたはらに笠もなく面相ばかりに美しく
見へたるを見初めひ鳴海の長に乞ふて都へ召つれ帰りまふ後もなく
妊身となり遂に御簾中と成まふ其後此地に下り伽藍をいとなし
尊像を安置しまふ此時は醍醐帝の御宇延長八年の法とかや此
由縁によりて本尊は今に於て笠を被きまふゆへ世人笠ちといふ

星嵜

笠ちとかり寺を称す
星嵜庄といふ
坂川百首

星嵜やあつたかたの漁火のほのもしらぬ夜をしふ事を　仲実

鳴海

尾張

沈裡謝まで武里三拾町むかしは鳴海浮を見ワたし浜つたひに宮たり
鳴海までゆきてしたるに浮満るとおもたの方鳴海の上聖といふ
此ゆくなり鳴海浮は青月の漢といふ名あり古詠夢こんぞ

後拾遺

なるこのうらといふ所にて人を忍日出てよこ行たる
かひなきはなる人しれもなかに事の香なるこれうらこえたり　増基法師

新古

さらちせり聲にそちかくなるみたかたふく月に浮やこ行らん　正三位秀能

同

うらゝ人の日もすくれになるこれ帰る袖より手為帰なり　通光

同

思こふとなる新みれうらの濱楸しほれてのこも年をふる代　俊頼

續拾

よのぞにのこなるこの浦乃うれ世貝雅あて人に名を知せたん　真昭法師

玉葉

なるみ浮浮せの波にいそんじ浦れ濱所にかゝる旅人　大江忠成朝臣

新後拾

よのぞにのこなるみの海乃沖は波立かへりてとしてふ浜代　宗祐法師

新續古

おもひる沖は白浪吉せんく雪けなるみの濱風ぞ吹　祝部成胤

鳴海上聖

又鳴海聖とも
称るなるべし

夫木

鳴海にて浮下に浦や成ぬらん上聖の名をかけ人もなし　系綱

伺花

古へにかゝるざりたまもで出れなるこれ聖辺乃夕暮れ聲　橘志仲朝臣

新千

朝なし浦るをみぢのまれにのこ形るこれ聖人の名の下葉　大江廣[illegible]

鳴海寺

今廢して
こゝろなしに
鳴海ちかて

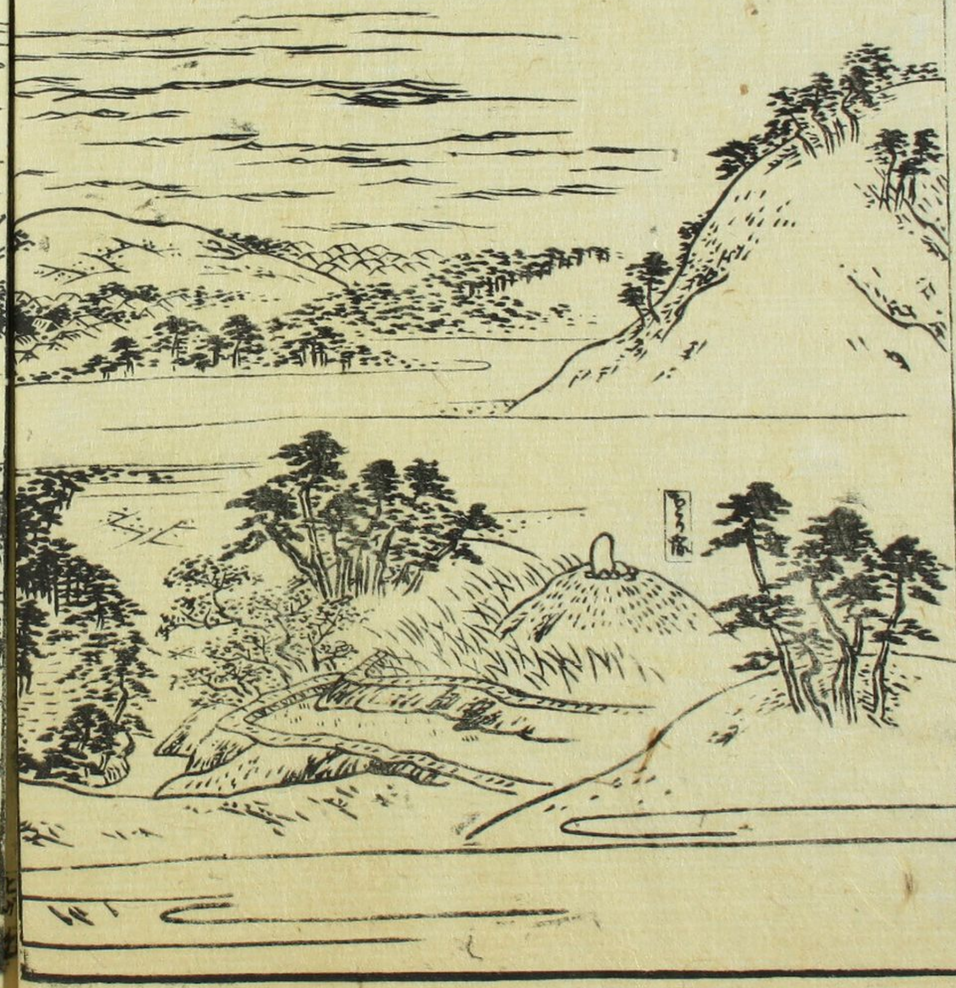
續古

夜に形にとなる身の果なれは又あくかれて浦つてふらん　藤原光俊

鳴海神社

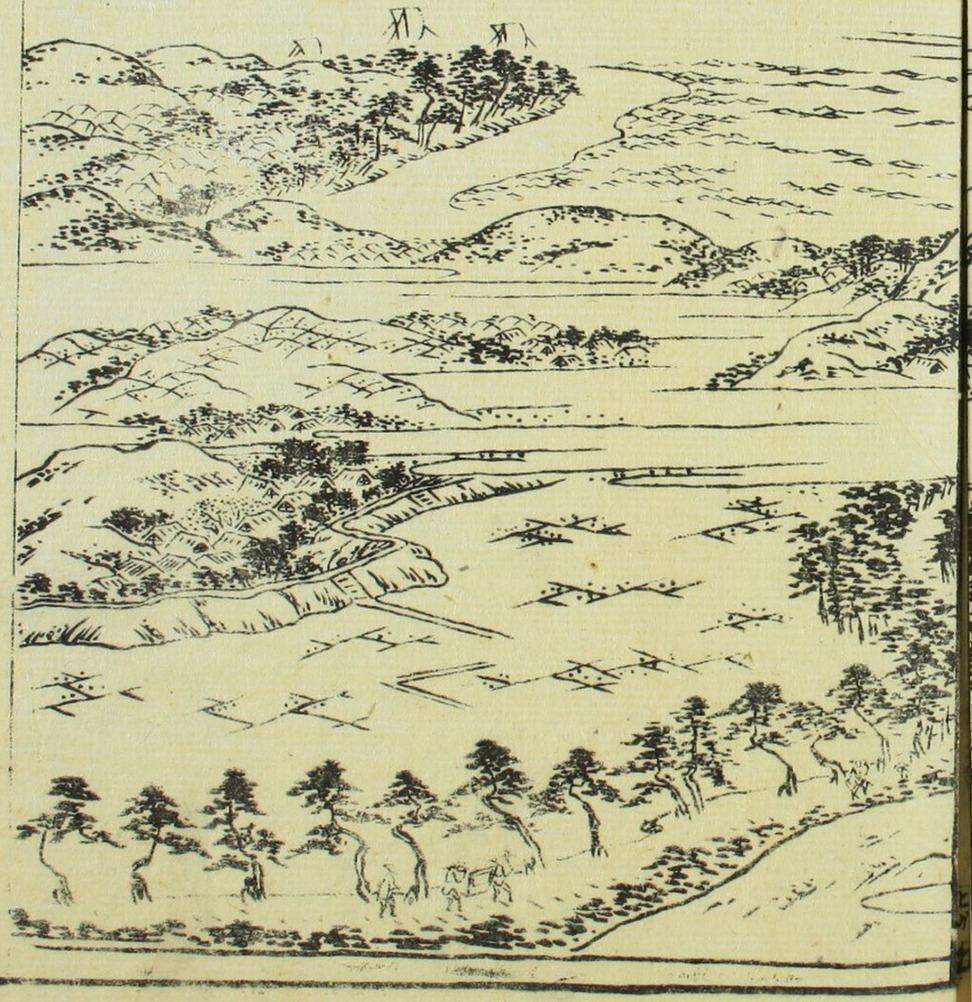
蕉翁 子為家

太田道灌ハ和哥の達人にして慕象集を著はるゝ時出陣せられし尾州鳴海の磯辺を通れし時園の水なれば閘の満干にしたゞ軍勢みな跏躙れ其時道灌古歩を唫ず



遠く成
をく鳴海の
渓子為
聲まで 汐の
みちひをは
しる

あれば諸軍ハ
渉し子為の
聲の遠ざ
渉るて安く
と渓辺を越
るく
あれくを
文武
両道の
大将とや
いへへき
芭蕉翁の
墨俣の
ちとうの句を
じたかのより
出たりと覚ゆ



鳴海神社 鳴海驛にあり延喜式内衆神日本武尊今東宮明神と称す此所の生土神とし例祭ハ六月二十一日

千鳥塚 芭蕉翁の句碑也山王山にあり南ハ大洋渺々として南勢朝熊嶽登卯の内海あるひは三河の伊良虞崎まで遥にうへつうしく

風系の地也弄雪驛中千代倉氏に蕉翁自画賛の墨蹟と家藏とに甚文にて

称覺の里松風の里くひ清ことを

夜明くらかさちは抱きの時日

はしきまの関ハ みちとや 嘆しちかり

此一地ハ所持し又蕉翁より俵られし愛文庫も家藏とし此ハ發句と石に鐫て千鳥塚となづく又同句の碑笠寺境内にもあり是より東に蕉翁の句と石に鐫て近年多く立る所なり古跡にもあらざれもことくく挙る事なりけり

夜の浦 鳴海より辰巳の方

名家 波あらふ夜のうらの神貝ハみきはに風のしてみ 西行法師

青聞山 鳴海よりはるかあなたに

まま 青聞の山乃ふもとやちかのしんかりての杜にあひしてきゝ 祐挙

名産有松絞 鳴海より三里許東にあり 絞さ東絞と風流に絞りて紅藍に染て 春ふ此市店十餘軒あり 旅行の人及び諸国へ 有松村と號今村の路傍の松原より三町許東に山にあり此所を原形狭石あるひは桶狭石といふ此地今川上総ハ義元戦死の所也

古松の下に標石あり今川上総ハ義元戰死所と鐫す明和八年十二月千代倉氏の建る所也此地ハ古墳多し又名江村の山中に千人塚といふあり

されも今川合戦の時

戦死の塚といふ

信長記大意

頃は永禄三年五月駿州の太守今川上総ハ源義元ハ大軍を催し尾州清洲の城主織田信長を攻滅し直に上洛あるべきよし頻に風雲なりしかゝ

信長ハ江州の佐々木義秀に二千三百騎の援兵を乞て所々の砦に軍將を

こめて今川の上洛を遮る中鳴海の兩城ハ山口左馬ハ弘家同半内弘高を

置しに心智して今川へ内通して敵となる又笠寺の砦にハ今川義季ハ八千の

軍兵を添てまれを拒む早今川の先鋒ハ遠州井谷の城主井伊信濃守直教道

に三遠の境に至る五月十二日大將義元ハ四万餘騎の軍兵を引率して駿府を立て

同十六日沈鯉樹に陣しなる信長の軍將佐久間大學ハ山田義九郎能防て丸根

の城を持つ寄手の内松平若四郎正親高力新九郎直重見又藏其外大勢

討れにかり同十九日なるも丸根城を攻るゆへ佐久間清洲へ援兵を請ふ大將義元ハ

鳴海の近へ桶狭間と云所に陣を張りに斯く丸根城今川勢に圍れて往ゆく落城

まぐさよー巻より久る折柄信長ハ諸士を聚て酒宴ー〳〵ス居ゑひー〳〵ス早くまれを殺つるもんぞ弓矢取て行の益ハあらんなど叱咤向ー〳〵報ずと雖ニの合戦を遁散ス軍門よ晒さべきものとさゝー〳〵十九日午ノ刻ばかり熱田の方へ馬次まぬ丸根城攻ると次おふ雄雄次ぬ聞ゑれど信長信作膳ふ銘ー〳〵今日の軍味方の勝利疑ふ一明神の加護ありそて諸軍を下知セ〳〵収久る夫ゑ熱田の旗座日あて遣付ふ信長ハ熱田明神へ鴈ー〳〵武幷肥後入道夕巷とゑ願書次書セ神前よ献上る其時明神ハ内陣よ物具の音頻ふとちらして攻戦ふ信長ハ本ゑ佐々隼人ふ秋田壱左討れおゝ酉の刻ふ至て尾州方岩室長門ゑ同孝楼合ふかゝと今川の兵八百三十人討ゑとしいくも経ふ岩河守も討れうまれよふとて佐々ゑ林秀貞三人の首次桶狭間よ巻ひ義元ゑのひく丸根警津城攻ると佐久の軍将おきと討ゑれ道途ようと収び桶狭ろの少ゑ谷合ハ小松原ふ惟幕次構て酒宴次ゑせられろ信長ハ勝ゑ誇ハ本ゑ一報を遂ふんと宣ふ時ふ池田勝三郎信輝林佐渡ゑ秀敏毛利新助秀盛米田権六勝家ゑ申ハ今ハ故ハ大勢ゑ味方ハ小勢ゑそいざ御思ゑべゑ止ゑれども佐久ゑ勢ハ寺ハ東ハ闇道次経〳〵岩昭寺の要ろ近ゑる山谷ふ到ゑ狭討のち次ゑて同ハ進とゑふゑ合ゑ乗ふゑ走ゑ狭ふ入ゑ義元の本陣ふ神まゑる其折節馬の雷次ゑ驚ゑ数の雹ゑ降ゑ来ゑ〳〵ゑ次ゑ沖斬ー〳〵て夕立頻ふ降て物凄ゑ〳〵ゑ波の如ゑ次ゑ居ろ処ふ稲妻ゑ閃ー〳〵ゑ揚ふろ今川勢ハ周章騒折次ろ〳〵ゑ和田太ゑ代利勝本下雅楽助嘉季中川金左衛門秀胤毛利河内ゑ秀頼同新助秀隆佐久間与五郎政盛ゑどゑの〳〵首ゑ取ゑ大将佐久ふ献ず義元ハ桶狭ろ山をめぐりて敵陣の後へ廻ろ泰三左衛門可成ゑ馬強ゑ軍兵次百騎ゑろ敵陣ふ入〳〵縦横ふ駆ちし大将ゑ義元ゑ討ゑて働ろ佐久ゑ勢ハ計策と巡ら今川勢次引包ろ体ふーて四方の谷々ゑ〳〵ろ体ふーて四方の谷々ゑ〳〵ろ綾波ゑ抱も一支ふ叶ず


尾州有松村の
名物は細川木綿を
いろいろに綾て紅と
藍とに染み
諸國へ高へ出れを
なりはちなげりと
いへ店おほ多く
ぐらくられをのを
買ふ家
所々にあり

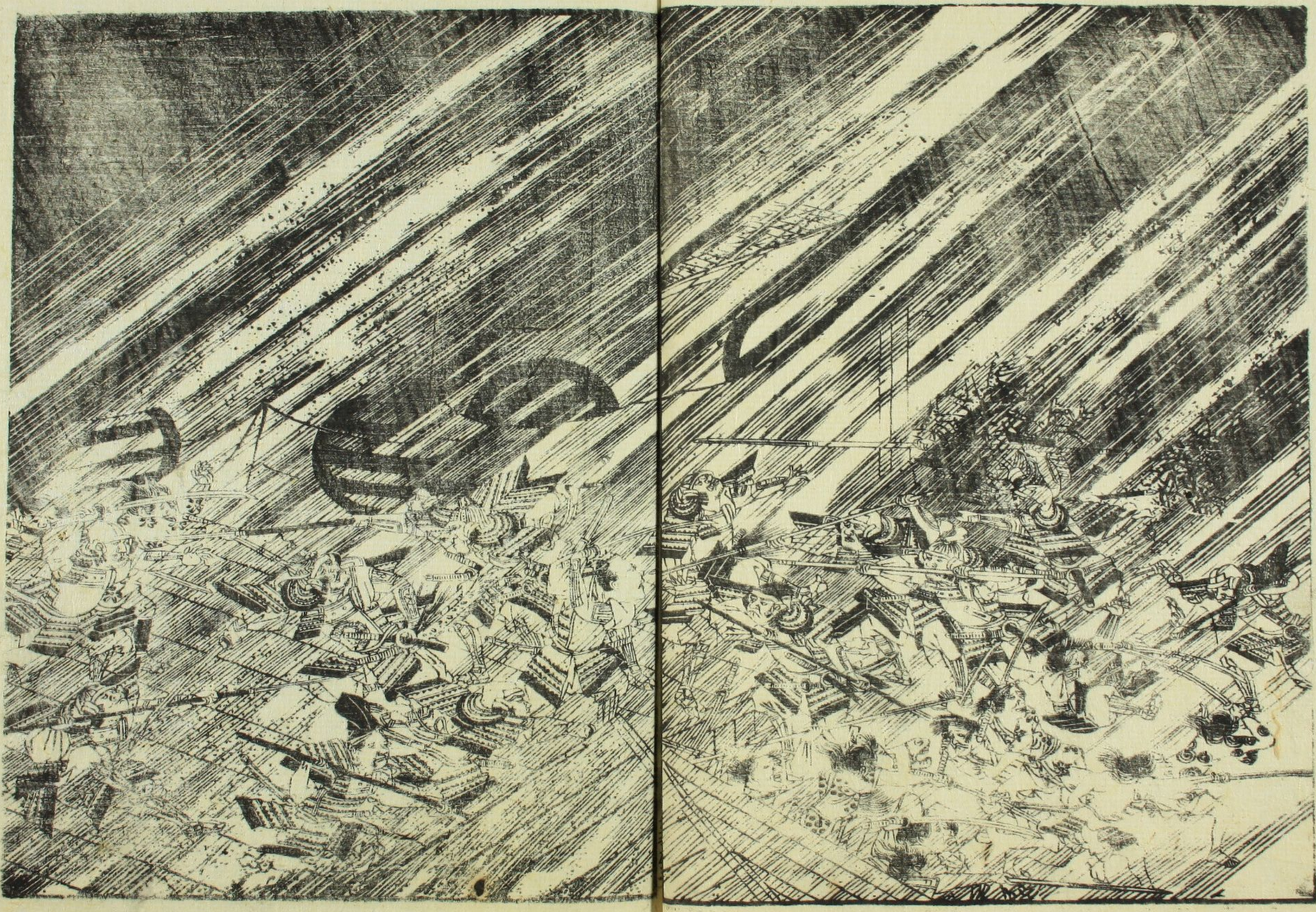

因云
近年
寛政七年の
頃ゆゑ
大坂家町と
いへ所に
主婦のものの
ありしが
病身ゆへ
後世なりかたく
困窮せしが
四十一歳
の娘もめん後
の職をしてく
おもし度に
精が出しく
父母と安樂に
書ひ入り
此娘十五才の
時
官家の
御上臈に達し
白銀壮枝
御褒美をも
賜ひたり
春泉齋画





永祿二年五月十九日
桶狭間夜軍

吉田友訂寫



ぬく惶しくも天運限りありて今川方の大勢ありしも討ち亡ぼされ
乱れ〳〵兵卒一枝せざれいかの駿馬武者ふ駈ちこれ闘ふ時〳〵長い車柚のごく
落ちれど十方を見ふ未ま織田道酒允捨仇海せる毛利新助ふ義元を獲樂田出羽
守中条小市郎遠山景左衛門河内守一ゆふまりて進と入る事電のごく
義元床机小掛をおりけ四方を白眼〳〵下知しかふ所へ服部ふまたまふ決死勢
中に割って義元引退て鑓をもつてはく義元無双の猛将なれば事とも
せず小平左ふ膝の口を割つけかふまた毛利新助後ふ廻り大将とまふ我ふ義元の運や
尽たりん新助ふ落合て終ふ首をとられん事口惜しと叫て實撿ふ入ふる信長大ふ悦び凱歌を挙揚ふる
代々相傳の山地とふ名劔を副て賜ふ林佐渡守是ふ上ぐ〳〵大将今川殿を毛利新助
今川勢ハかくとも志らで挑戦ふふ林佐渡守是ふ上ぐ〳〵大将今川殿を毛利新助
服部小平太を討とりたりと奥られば今川方まれ必ず〳〵力と落一敗地も山一筋ふ
駿河勢討れしと知合二ふ五百餘人討れしとぞ夢〳〵ふる
されば今川義元駿遠三ヶ国を守殊ふ英雄武略名ふ得ふ海内り只鬼神の

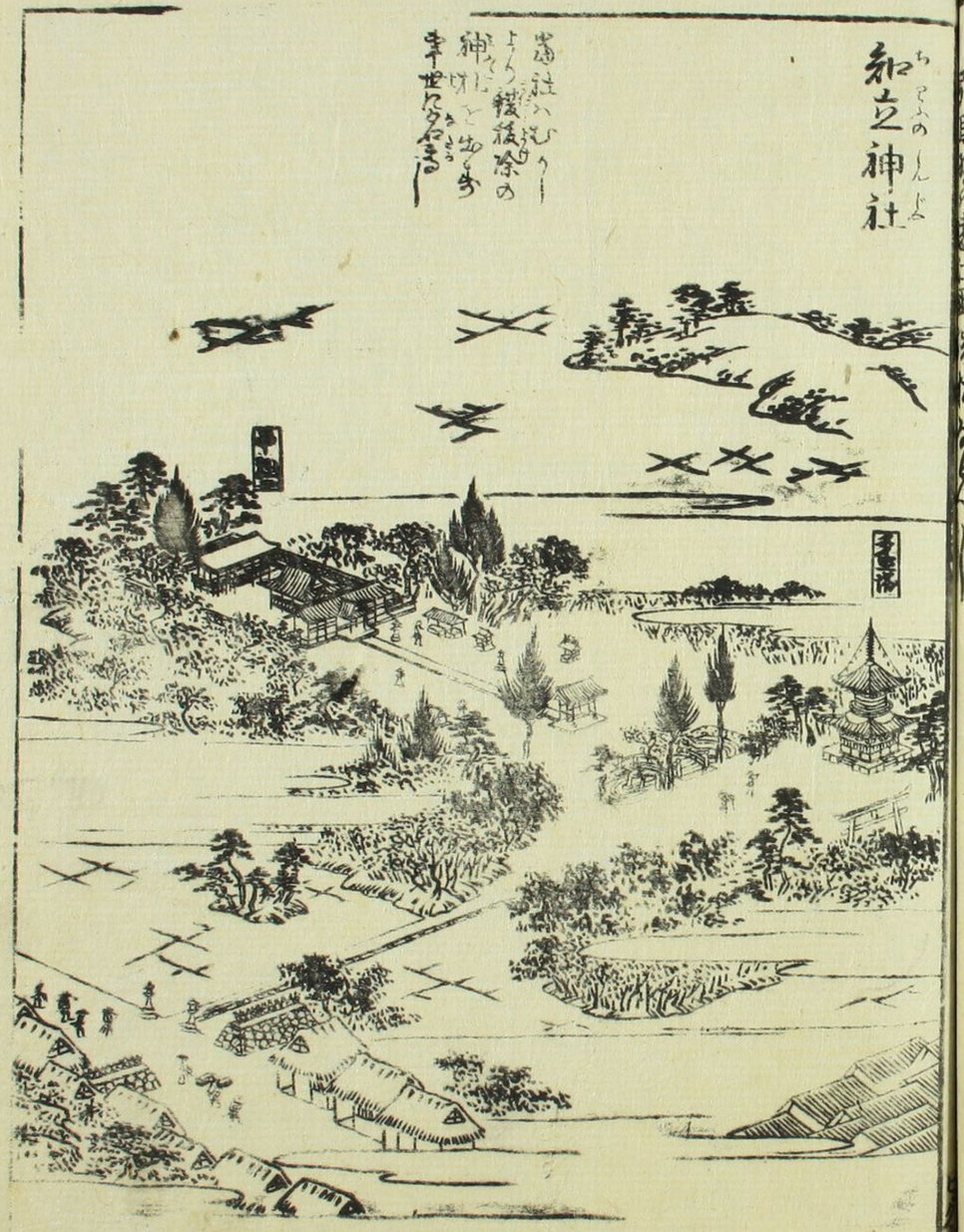
まぶだりふる兵石ヶ平ぢりおまく枯散い魑魅ふ托一羊枯ふ墮涙
の碑も業月累りぬれた苔層盤一されども雄名い天地ふ久〳〵く
文物い日星と芒ふ高一ふ

堺川 尾三二州の堺川（書紀）

ふふ冬又ふ代筆世のさうひの二の圀のつうれこう

岡寄まで三里三十町ヶ宿の入口ふ相妻川とふまり川谷ふ流て海ふ入
曙記云池鯉鮒ゆく〳〵神宿ふ程ふ名ふあひうとさうふの料理をとうる迚の理由

知立神社 駅の西入口ふまり延喜式内文徳實録云仁寿元年十月従五位上
三代實録云貞観十六年二月授正五位下同十二年八月授四位上
祭神菅丞相尊 例祭四月二日浅駅中通隣二十餘村刈谷知下等の生土神
多宝塔 社頭ふまり傳云嘉禄三年建之（基楽事跡山まり神事ふ浅駅と刈谷と勝事ふ
山岡忠左衛門とまりうち再建の檀主と云ふ



古額 表 正戈位智鮑鮒大明神 裏 正安辛〇丑八〇神〇法印

神殿に藏む裏文字古朽分明なるべし

末社 神母祠 神明 荒神 穀神祠 其外廢祠多し

神離門 多宝塔の傍にあり 石橋 神離の外にあり池を浮洗といふ三下司の奥なりしなん

的場 多宝塔のおもて例年九月五日弓の祭式あり近國なりしなる飛りて射旅も神的に中ゆ矢に額に餝こゝ姓名に記し其物も古ハ流鏑馬あり

除蝮蛇神札 別當松智院表社人なりあれと出に遠近あれと言して授る者多し夏秋の頃山中叢林にあれと懷中すれば蝮蛇迎去るといふ

御手洗池 駅の東北入口にあり奥鱗多し殺生を禁じ旱魃にハ土人の農民知立社へ雨に祈り社頭に百八燒を照し此みくしは臨んで社司祈雨の幣に なる夜の御便に及んで神宝桂の面に出して此池水に注く忽感應ありて膏雨を此面古代の作にして舞楽の具に此外にも古作の面神寶にあり

不断の池鯉鮒の宿北本綿市

此句碑別當松智院にあり元祿室永の比まで四時此駅に諸品の市あり本綿ハ此宿の名産にして江戸にもしれ此付白といふなり

池鯉鮒馬市 毎年四月廿五日より始て五月五日に終る駅の東北に駒に繋ぐ事四五百にも逮り馬口勞牧書集りて馬の價を極むるを後合松といふ此壁の東北に駒場村といふあり駒を宿を祈なり

又壁中に桜の馬場といふあり年ゆ年ゆ年に駒場村と云ふ毎歳此市の間ハ駅中大に振ひて諸品の市店に餝まて掛多し馬卒馬長廢る事多し此所を引馬壁といふ也 奥神の吐懷編によれば

引馬壁ハ遠江國宍松なるべし



沈鯉鮒驛
馬市ハ毎茶
四月廿五日より
始りて十日の間
あり周禮曰
八尺已上ハ龍
とし七尺ハ駅
とし六尺を馬と
いふ馬ハ相をる
ゆへ三羸



五駑ハ除く
相をるゆへ
ありしを

八橋古蹟

池鯉鮒より八町許東の方牛田村の松原の中に石標あり是より数八町許にして三河国八橋村に至る古松六七株具眺望の丘山あり古松六七株具眺望の丘山あり古松六七株具眺望の丘山あり

八橋杜若
古蹟

燕子花
夏も
むりしの
交あらた
知立
祖風



卯月の頃八橋の
[illegible]
[illegible]
下ふきて[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
今は
さめ川
[illegible]
みな麦の畑
[illegible]

かくて二の國よりうぬ雑俳ども馬場とりて故里の野原をさし妻の橋氏
名ばかりて八橋といふ砂ふる睡ら驚き夏狐薄ら去て水ふきてうち往ろや
時依迷ふ開ふ花いむう井色のうつし伏ぬん橋もあらで橋もあれども
資度法ろうへぼんん相如ず世依ろうへぼんん相如ず世依ろうへぼんん
幽子身依拾ふ窮ふ小類て寿橋と波ふ八橋よ八橋と今てふおふふ人い者
もさきや橋杜よ橋杜よおのれも朽ぬろむろ〳〵朽ぬろとのき今もふもぐ

依能〳〵きろこふのろ〳〵依ん杜きても出ろ〳〵ろや

送子和赴三河
東方千騎下関門ノ澤國ノ江山雨後昏　物茂卿
杜若橋邊春艸色知君駐レ馬ヲ問ニ王孫ヲ

三河八橋村

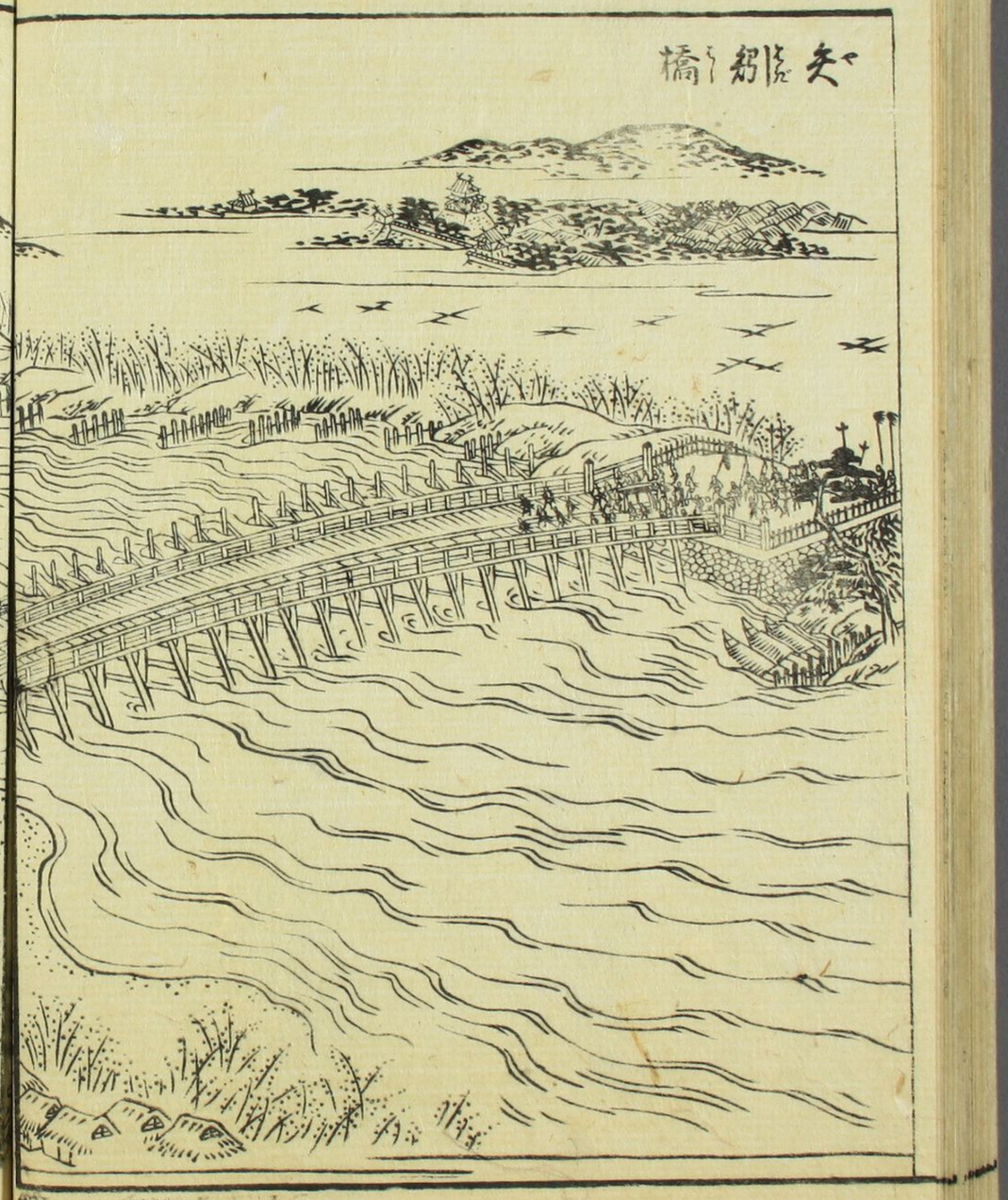
中古遺跡問荒村落日春陣野水昏
燕也不レ來花也未レ歸燕燕慈菴主人　六如菴

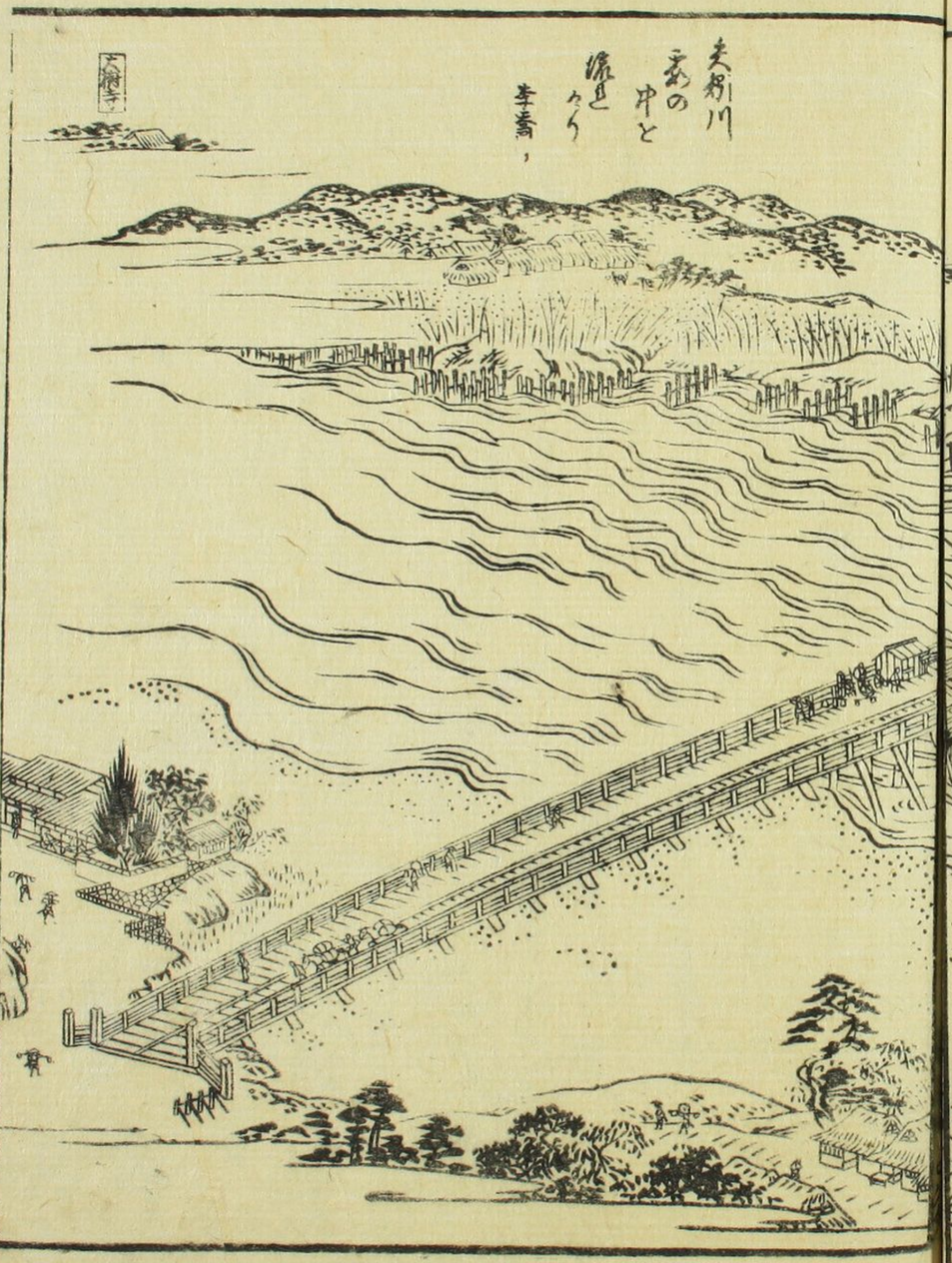
夫八橋燕子花の名不依賞ぎろ
たり車中將よ吾妻下り依け物語ふ編集よ原ふ書ふ古今説々多し

世ふ業平朝臣自記とひあるひふ寛平の宮女伊勢ふ御の假ふ諾冊ふ尊の
みとのまぐひふう男女物語ふふと伊勢の二字ふ妹背を畧訓して舎ろふ清輔ふ
後拾遺ふ業平ふ作れるふ歌ふ同じ人のわかき時よ云
ふ称名ふ多ふ集ふ歌ふ入ふとぞ一説ふ齊宮の事と拉とふのふ伊勢
と号ふ和泉式アが事ふ齊宮の事を初よ書りとふ賀茂の眞淵ふ古ふ依ろて
伊勢ふ假物語ふふ説よ一度せり業平ふ自記とふ説も謬ふん仁和の御門芥川
ふ妻ふ事と書ふふれ業平ふ後妻ふ事と一ふ〳〵ざる事を編ぜふ按ずふふの郷ふ風流と行平と一ふ〳〵ざる事を編ぜふ按ずふふの郷ふ風流を體ふて古ふ
依ろふこと陳荷ふ駢達ふ文を以て称語と嫩婉ふ基さて後人艶文家の假ふり
必ずも盡ふ在氏ふ出ふ或ふ云ふ業家二代集傳授ふもふろふ物語と初ふ遺し
むとふり源氏物語ふ虚を實ふ小書ふふと虚ふ假れり称ふこ僻案よ
虚と實よまるゆふよ惑説多ふ実と実ふふ虚ふ虚ふ入れ〳〵紛ふ事ふ一ふあれ
伊勢物語を續口傳ふ業平朝臣一期ふ間ふ事を書ふふ〳〵それふ古ふ依

書ハ今ハ上の句下の句なきなれ所々作物語のなるひとしるべし
此頃の中にあゆく川の人をでなれば橋を八つにてせばふよりてなん八橋と書るなる
真渕ハあせく川と辨じ玉水と四方の田圃の用水にして八流れの小川を堀て
まれ小橋をひてしたり此ゆへに歌子の如くよんぬると書たり一ツ伊尼鎌倉下りの
時ハ早廢して橋も燕子花もなきとよんでたり然れハ年久しき廢蹟なれど
此住物物語より出て杜若の幽艶なるとおもふ一名白吉花ともいふ
齊宮花記
夏草のおほ江中にもかれよ菓折袖までもむらさきになる
八橋杜若の圖を無うしたり屏風障子の画諸品の蒔絵衣服の織物菓子
名まで此をかりて図を論ずるに及ばまづ此国一州の名高に勝蹟なるべし
橋雲廢寺 八橋古跡の側にありむかしハ伽藍巍々として門おハ鎌倉海道にして
東行西行の旅客さて下馬も今絶に一堂ありあれど下馬観音
といふ知立の祖風云ツ此ゆへ耕まれど古尾多く鍬頭にかゝりぬ那て此邊
むかしハ入江なるよし東海乃前にさてたり村さてたり川ありあれも沢辺なるべし云云
無量寺 八橋村にあり禅宗八橋山と号ハ堂前に業平竹一本薄あり
堂後に杜若あり又八橋古梳ハ什物とハ
本尊正観音 寺説云業平の作といふ詳なるに又業平像あり又堂
前に八橋の碑あり下野州奈須黒羽之産由良不諗立之云云

當寺縁起に業平ハ元慶四年に薨じ給ひ其遺骨ハ大和の在原寺に半ハ
藏免遺命によつて自像と遺骨の半ハ此ちに納しと其後寛平四年
五月十五日此入江の汀に墳を築といふ此寺説正しからハ河海抄に云在原
業平ハ白鳥雅にして和歌ハ若ハ六哥仙の其人也一旦吉野川の上に昇て
終る所を知らずと云云又八橋の事ハ寺説にむかし八葉の児ありて沢辺に
捨び所ハ落て死を隣里の農民あれと告あれど父母たゞに悲驚し
沢に橋のなきを恨追若の為に一橋を架ハ八方の児より始る橋なるもを
八橋となづくこと時告来る人の里ハ告の郷といふと我若に詳なるべし
狭投神社 賀茂郡猿投村にあり知立より北の方四里許海道なり
高山之例祭九月九日高園あるハ吳淡尾張より敷匹の馬を献じて賑ハし
祭神大碓皇子 此皇子ハ景行帝第二の皇子日本武尊の皇兄也社説云
景行紀五十二年狭投山に登て蛇毒に中て薨じ給ひ
御年四十二歳云云或云古事記岐美二尊の御子に頬那藝神あり狭投に
刻ハ此神なるんか延喜式内又文徳實録云仁壽元年授狭投神
従五位下ヲ三代實録云貞観六年授従五位上同十二年授正五位下
同十八年授正五位上ヲ元慶元年授従四位下ヲ云云
矢剣宿 矢矯あるひハ矢作と書ハむかしハ驛宿也今二村となりて西矢
剣東矢剣といふ國名風土記云むかしハ日本武尊東征の時
此宿にて矢を多く作らさしめ給ひ名とハ
新六帖
梓弓屋を紀の里ハ此ゆへ梓弓にのこゐる家さて終う事 高家
類聚
狩人の矢剣にさよひ屋どりなばあまやけてんとよ乃川水 在原内大臣
富士紀行
道のへの雨をこの世に紅葉してあらや屋をさの里とみるらん 世元君


矢部橋


矢部川
霧の中と
流れ
かり
李喬

須磨姫塚　西矢別　左の方圃の中にあり　むかし一矢別の宿に長者姫矢誰の女給ふりしが平家の盛衰と十二段ノ調ふる琴師の十二神樂を聞きそれを須磨須磨と称ふ今の世も須磨の浦の浜辺に又仏里ふ芸和寺と云九尊の像経の像あり寺號ふ云九尊判官五妻下りの時ふ宿し美婦塚同所東の山ふあり同妻女身亡と浮き妓婦の塚と云ふ名寄

思ひきや矢矧の里の妻なるふもおくれ先立

矢矧橋　矢矧里の東ふあり源岐蘇山溪ふ落ち来る塚川と云ふ西尾ふ到ると二流と成海ふ入る矢矧川　男川豊川の三大河ある四くわり

万葉　三河之渕瀬物不落左提刺爾衣手潮干児波無爾　春日

新六帖　名居せそまろうてあよあげさうやさ川の鷺乃一むら　行家

矢矧橋　矢矧川ふ架し長サ弐百八間　高欄頭巾金物橋杭七十柱　東海才一の長橋なり　紀行

う紀世ふいはふされし梓弓　東紀行

真さくふされとあれやわさ忘らん矢矧川乃橋の板をも　光廣々

今いむ〳〵建武の比足利治部大輔尊氏鎌倉ふ在〳〵天子の命に叛〳〵ば新田左兵衛督義貞勅度使と蒙りてさされ下りけり三河の西屋ふ陣を足利直義い山川の東にはべ上下の瀬とうさして進み来り比宮軍駈合せて足利勢を伐ばー

警固まて退対ぬ〳〵ども時ふ足弱も猶ほ退駈たゞまぐらべ足利鎌倉ふ云ふら新田伊豆の國府ふ洋着ー我勇も悩ぶ幾ふりぼうと天運と云ふら威ふ懲られ牧縁の俸史郎〳〵足利ふ幾されぬ云ふ我病情ふれ抑ぶ合戦ふ根元ふ鑑ふ　後醍醐天皇公家一統の御代ふ帰ー又文塔宮ふ足利直義ふ託けぬ〳〵を真義姦佞邪知ふ右ふれ給ふ縁ふ寄せ忽ふ徽ー天皇ふ御恨ありて足利ふ滅すべき勅ぞありく尊氏新田ふ攻られて敗ふー縁倉ふ建長寺ふ入〳〵判髪淳衣の姿ふ成降人ふ出でぬと云れ〳〵依諸軍ふ諫られ又旗上ー史ふ八十万騎の軍勢と聞勝利ふ得ふふて大ふ紀ふ入ふくう星霜累りて矧川の水ふ古今ふ書られ悠々と流ふ四海ふ波風穏やーてあ泰勅の諸侯ふ弓を袋ふして威風檐上ふ凛々ふうされば相如ふ橋柱の筆もふく張ふ房ふ妃橋の五ふ書も入られ只五彩の虹とそふ架せー長橋とふ此所の事ありぐー

西辰紀行　建武戦場　森白双是昆吾波激河邊千万夫　恩賜ニテ旌旗如日色東隅雖得失楽楸

羅山子


岡崎は當國都會の
地にして賈人をくく
茅のあたらしきといふ
半かし仙方延壽の
良茅を求めあるを
岡崎女郎亮と小奇
とも飛人はまれに物
不老の媒とするも
みな旅の風流とや
いふべき


都出来
神しも
旅の
日本橋
延壽丹

藤原氏すでに七里半岡崎城旧名龍ヶ城人初て南城を築くそれより代々諸侯の居城ぜーね城下の町筋九六十餘町九七曲といふ人家軒端北ふーして西ふーて繁昌の所と東八幡宮立ち寄り壮麗ふーして放生池石高橋あり生土神もん

今朝までそれ迄名ある茶椀ひれおろされよと人の待やせ　小堀遠州

成道山大樹寺

岡崎七里許鴨田村にあり　浄土宗　松安院と号す

本尊阿弥陀佛　座像七尺脇侍観音勢至上人　寛永十八年の建立也

将軍家御魂舎

本堂の側にあり　源頼光念持仏と伝ふ　神像右の方の手に鞭ふ後光の画あり　杉戸の画あれども永徳の画にあらず　虎の画そのかみの筆の跡あり

牡丹の間も同じく鶴の間も同じく金ふーて仕切り又大書院にあり　鶴の画あれども永徳の画にあらず　虎の画そのかみの筆の跡あり

将軍家御成の間上段松の絵左右に鳳凰あり梅に雉子　襖側の杉戸に猿又布袋の唐子遊び　金縁組入井中に菖蒲　それの画あり　什宝よ吉備大臣の絵巻物　狩野元信筆　百馬図　狩野探幽筆　三十六歌仙　狩野探幽筆　三幅対　源氏物語　狩野探幽筆　三幅対

大屋川

里塚より三十町許なり一名男川又大平川ともいふ三河の三大河の一なり　石を組まて頗々なの谷山辺の春景うつくしき事言語に絶す

小豆阪

大屋川の橋爪より古良路を七里半あり　天文十一年八月十日今川氏輝北条氏綱同小三郎氏堯と織田信秀と和睦の時此所にて三人会合ありしとなり　信秀より田原三河守へ馬一疋太刀一腰送る　氏堯より信秀へ馬一疋太刀一腰送る　氏輝より信秀へ馬一疋太刀一腰送る

矢矧橋

矢矧橋をわたるや人　馬頭

千人塚

満寺門前念仏堂あり　家伝に源氏の軍兵戦死の時此所にて千人塚と名を改めて今に至れりといふ　其外数々の古戦場と今川義元の陣寺寺号斎長老織田方の陣寺寺号斎長老等あり　織田信長と今川義元の

小豆阪

大屋川の橋爪より古良路を七里半あり　天文十一年八月十日今川氏輝北条氏綱同小三郎氏堯と織田信秀と和睦の時此所にて三人会合ありしとなり　信秀より田原三河守へ馬一疋太刀一腰送る　氏輝より信秀へ馬一疋太刀一腰送る　氏堯より信秀へ馬一疋太刀一腰送る　今川義元の古戦場と今川の先陣を羽北条綱成と織田信秀の古戦場と今川の先陣寺寺号斎長老織田方の陣寺寺号斎長老等あり　織田信長と今川義元の

大屋川

里塚より三十町許なり一名男川又大平川ともいふ三河の三大河の一なり　石を組まて頗々なの谷山辺の春景うつくしき事言語に絶す

矢矧橋

矢矧橋をわたるや人　馬頭

千人塚

満寺門前念仏堂あり　家伝に源氏の軍兵戦死の時此所にて千人塚と名を改めて今に至れりといふ　其外数々の古戦場と今川義元の陣寺寺号斎長老織田方の陣寺寺号斎長老等あり　織田信長と今川義元の

村山

村山あり　和名鈔に尾張国山田郡両村と一説に猿投山ともいふ　本三河国二村山の紅葉をみくらべんとよめる歌あり　一説に猿投山の東北にあたれり　今さらに二村山のもみぢ見ん

二村山

二村山あり　和名鈔に尾張国山田郡両村と一説に猿投山ともいふ　本三河国二村山の紅葉をみくらべんとよめる歌あり　一説に猿投山の東北にあたれり　今さらに二村山のもみぢ見ん

名寄

今さらに二むら山もこえてみん名にしおはゞや月もいるとこそ聞け　樊沖吐懐編　編能え

まま

二のまの二村山紅葉つまでは山せもとめぬ物にぞありける　俊恵法師

山家

山ふかみ二村山紅葉つまでは山せもとめぬ物にぞありける　西行法師

山ふかみ二村山紅葉つまでは山せもとめぬ物にぞありける　西行法師

まゝ木　あらし川二むら山の岩はゞ　俊忠

續古　ちぎにかゝしをさゞかうへのしらゝ　[illegible]

同　ちかはたは聖徳のきくちらあらはれ　[illegible]

千載　さ月屋み婦たむら山の[illegible]　權中納言[illegible]

衣の里　岡崎の山にあり舉母とも書れ今城下となりて内藤侯領せらる左の
千載集經頼の[illegible]の時よはれしまや[illegible]

同　[illegible]　經頼

まゝ木　白妙に咲[illegible]なれる卯の花を衣の里のはゝ滿[illegible]　[illegible]

藤川　三河

赤坂まで武里九町むかしは此藤川[illegible]　[illegible]

方長　[illegible]　[illegible]

紀行　[illegible]　好忠

山中里　藤川より三里新東に農家に白草染草の細工して賣し此辺[illegible]木村[illegible]
山中忠重の古城あり右の方[illegible]山に[illegible]八幡宮立[illegible]

紀行　おほつかなしの山中に鳴[illegible]　雅世

同　旅衣たゞ川さなしとも[illegible]　[illegible]

宮路山　貝原五口嬬路記云宮路山と今は只山中とのこいふむかし　持統天皇行幸
[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

家集　[illegible]　[illegible]

十六夜日記　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

此山まていむかしゆゑしまて地をもるよき所かけてあるを
遠ちかりなむかしもまえしみや地宗なりしまえのあつりあふよを　阿弁尼
山の裾登に井のある所にかや屋の一ツ見ゆるいかにして何の役にかへてまむらんとも
ぬしやたれ山のまゝ登に着志者てゆくりさむしき井の一むらゝ
東鑑曰頼朝之洛之時建久元年十二月十九日己亥入夜令宿
宮路山中給ツ

二村山法藏寺

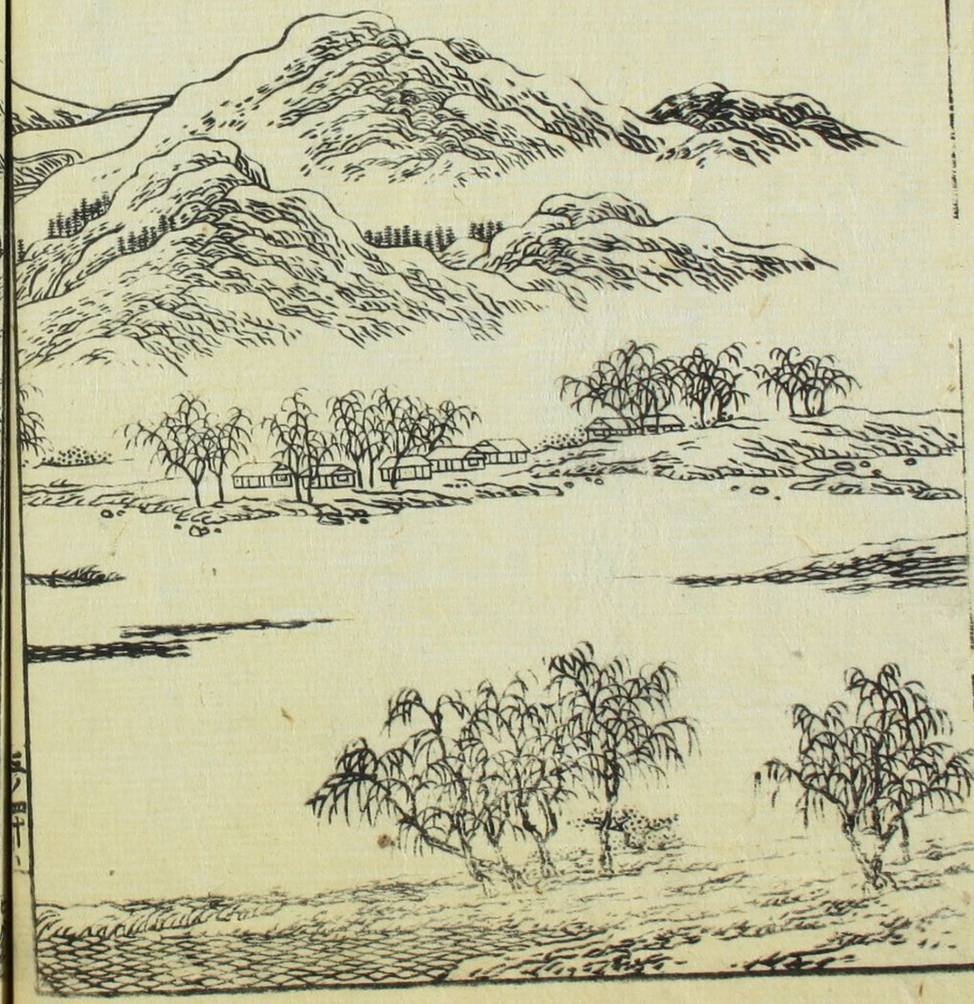
山中村にあり初は行基僧正の開基にして法相宗也
本尊は正観音を安置して出生寺といふ
紀行
たゞ頼光なる御あらんは有名の雲に出て生るゝちとこれ也　宗尊親王

本尊阿弥陀佛　後に松院御宇至德二年京師赤福寺教翁上人来りて浄土檀林とし法藏寺と改む二村山と号する事は此地なるゝ乱
其證実へ此ある釋迦弥陀の二尊にやあらん境内観音堂に初の本尊を移し
経藏領守あり上壇の地に將軍家御宮下殿の地に名泉あり賀勝水と
よぶ剛初將軍家御手習の御硯水とも又門前に大乗の古松あり蠟稿掛松
といふ風原東記云御手習此ちにて拝し其時より御愛樹といふ
御油まて十六町右の方に大井外記の古城あり又美濃國にも赤坂あり
旧記混乱多し　両赤坂ともむかしより招婦の事なり
紀行
一歩遠ふゆきての人ぬりこれ妻なりてびかれ居ちかりけるゝん　平齊時
まま
さや海なる花をさなりて赤坂の名をあらはして咲はしらな　為相

御道中記
茶海へ下る海の名を有名は直出て我はかのくとあかさうの花　御
紀行
赤坂と愛はる里は茶屋にて夕日かゝ屋く名にやありけん　近衛関白
光行記
宮路山は越まへるほどに赤坂といふ志ゆくなりあふあり名を女ゆへに大江の
定元が家は出るも長之人の發心せる道其縁一にあらねともあらぬ別をあしれし
海よひのんをしとをし真の道をおりむかりなりかくてあはれ
いつ我しかしきなるをもてて葛のそれいてかあらぬかくふう無理し　光行
此大江定基は儒官之志賀寺に入て出家し寂照と改名入宋して異國まで是
名は行ひけり定基出女の色香に迷ふ美濃國の赤坂なるゝんか考へなし
貞應海道記
美濃國は赤坂の宿をとるむかし此宿の桂君花の顔春まゝやかにして蘭質
の秋芳しき女なりけるを良は潘安仁が身妹にかりて樊を三州吏の妻妾に結ぶと
妾を良人に魁じて世を早し良人を妾にあへれて家をいれ出しは利生の
菩薩の化現して夫は導なるゝ又志ゆくは圓通大師の發心して妾はをく
る乳母の名知識大ひなる因縁之　中略
いつましくうへぐみち此ちにまし義をもろうは若なりせば

本野原富士

小条平泰時
本野原の通標
にとゝく柳成
多く植られ
うり究れが
紀りにもこれ
と賞じくく
周公且乃
耳棠丑も比
せんとぞ志る
されなり





紫城春色曉蒼と
青柳や
赤大君の
艸ゟ木ゟ
蕪村

洛東大雅堂
餘夙夜

三州牛久保山本勘助故居

甲刀大守大膽大武田晴信ハ山本ヶ茅廬ヲ顧て天下の安危を論ぜ



法橋北偃

應ゝ
いくと
あるくや
君の門
去来

賢名如雪
雪飄門厚
問暫聽天
下論苻氏
夙據王猛
計何勞異
日定中原
右題山道鬼雪中
應聘之画
熊尚之



吉田まで武里半四町見入原迄云古い三河のやさみ通ゝ〻〻〻
未をおくりかねるこゝろ〻〻〻老ぬ〻〻〻いまれゝゝゝゝ豊川水汲とゝ
ゝゝゝゝゝ〻〻〻志賀須香のゝゝゝ水あるゝ

今いまるよゝゝゝ〻〻〻吉田へ出る

本坂越はれゝゝゝ左の方へ別街道あり荒井今切の海上弘海ゝゝゝ
陸路をゆく遠州浜松の東へ出る此本坂越しいふ

嵩山 舩ゝゝゝ御油ゝゝ嵩山へ四里 三ヶ日 嵩山ゝゝ二里半 山路ゝゝり 氣賀 三ヶ日ゝゝ氣賀へ三里
まで関所看御番ゝり

茅場 氣賀ゝゝりかやんをまて四里ゆ所本海道ゆて遠州浜松ゝゝ山ゆゝゝ
三里許江戸の方ゝゝり天龍川まで三里都ゝゝ阿波ゝゝ十三
里半二ヶ日ゝゝり氣賀まで山路ゝゝ

濱名の湖水弘見ゆゝ一風来真景の

二見道 御油ゝゝ八幡野にを原ゝ本野ゝゝ

豊川 舩ゝゝへの街道ゝゝり

石むの川魚ふ打出ゝれい四方の海ゆまゆふゝて山ゆゝ黒ゝゝ秦田ゝ一
千餘里弘見ゆゝゝたゝんの松ゝゝて本土ゝもふ蒼茫ゝゝ月の夜ゝのぞこ
いろゆんと寒ゝゝ覚ゆまゆゝれる篠原の中に救をふこゝゝけたるゝ有ゝゝ
まも迷ゆぐさふ故武蔵乃はゝるゝ 鎌倉 執權 武蔵守平泰時
れまゆ物もいまぐ後ゝたのまでゆゝゝれゝもうゝゝまゆゝのまゝべと
なれをもあゝゝゝうゝを後ゝゝ周公旦ゆ周ゝ武王の弟ゝ成王の三年ゝゝ

燕ゝゝゝ國弘はゝうをゝゝりき年ゝゝゝれゝの方をおさゆゝ時ゆゝゝの甘棠
のゝゝゝをゆめて政を行ふ附はゝゝゝ諸ゝゝ民ふ至ゝまて甚ゝ本を
うゝゆゝゝ覚久人の勲弘ゝゝゝ周の民まゝゝうて
其徳政をゝのぶゆゝ周公去ゝ跡まゝでゆゝゝ
うゝ弘のゝ作りゝゝ後二乗ゝゝ
附國は民本ゝ甘棠の徳を本すゝゝれ多の年ゝ風月の遊び
いふ御製をなゆゝ勢ゝりゝゝもひゝゝやありゝゝいえゝゝ
召公のゝゝ公退て人をそだゝみ物をゝ
て植ゝゝれる柳ゆまで是ゝりゝゝ
そだてゝ行末ゝゝ事其本意ゝゝゝたゝゝゝとゝゝ
栽をゝゝゝゝゝゝの柳ゝゝゝゝゝゝ

今の其宿の人の家居をさへ
〳〵そふはしく〳〵しさまでまもる事ニ云なるらんやまの
苔もふみつきたる里人の今〳〵あとまでとゞめ
ねどもあとまでとゞめ
賞曲亭

おもひつゝなをみ川のそこの世に
名所三百首

東鑑云嘉禎四年十月廿日辛酉風雨辰刻ニ出ニ御
於本野原ニ甚雨暴風忽而御輿前後人人者不
及擁レ笠皆以濡レ鼻午刻以後属晴酉剋橋ノ本ニ御
宿云

三州吉田驛植田氏の考ニ云此本野が原ニ東鑑ニよるに訛
点せしとの説ハ何ニ拠れるか古ニ音ニ訛
事古ニよるべし又よの豊川の
東鑑ニも嘉禎四年二月八日類従将軍豊川の宿ニ着御ある同十月十日
豊川の駅ふ着御のよし又ハ豊川の今道といふ名ハ
三河国寶飯郡度津あしを訛言ふハ
歟郡ハ志賀須香の渡ありて
度津豊川のあよりく慶
路ゆく庄と書しもあり
久しくさまでありしもと
なし

おもひつゝなをみ川のそこの世に
名所三百首

あれも尚くまもる井の志賀波香のつゝうらめしひかれ

家隆

順徳院

御津神社 御津郡 今舩洲明神と称ス

こゝのしんよや 御津神社

祭神下照比咩命 風土記云御津神社圭田五十六束
所祭下照比咩也天武天皇四年二
月始奉ニ圭田一加ニ神禮一文徳實録曰仁壽元年冬
十月三河國御津神禮従五位下ニ

神詠

大空もそこの松原いくちよもいれいちらん
あれハ神ほこの蘇る岩の石ゐてある人の
松ちよ〳〵ゆひしとある人の

鐘銘云日本國三河州御津庄大明神洪鐘也述
一偈而銘之一口、脱体圓成、河津龍宮、
得華鯨、聲音忽落、殿ニ鐘ニ、耳処湛寂、群有
聴驚、一根纔脱、六華盡清、沙界聾聴、庄境誇榮、
民長民ニ伯、政家ニ平、寅昏幾許、願心呈誠、慶
入理、歴分明、

享徳元年壬申十月十五日
當庄刺史細川兵部少輔源朝臣
大願主藤原政家

又鰐口の銘ふ万治二庚子暦三月十五日惣氏子寄進の旨記ス
兎足神社 驛路小坂井村ニあり延喜式内里俗兎足八幡宮と称ス
例祭四月十一日放花炮を多く揚る

祭神葛上王　古事記云開化天皇條下大股王之葛上王者比賣陪君之祖　社說云祭神兔上王白鳳年中依神告併祀八幡宮祭式射取雀十二羽爲祭料三代實錄云貞觀六年二月授從五位下神階並加從五位上王參河國正六位上兎足神社　鐘銘云參河国宝飯郡渡津鄉兎足大明神　洪鐘右爲志者天長地久仰願圓滿國上安穩諸人快樂所奉鑄也　大工藤原助久　勧進聖見阿弥陀佛　檀那朝阿弥陀佛

應安三年庚戌十一月

山本勘助故居　牛久保の長谷寺ふ勘助の守佛摩利支天の小像ふ安置ましけり　社頭の東方土中より掘出ししと其遺蹟方五間許の地所の村老云ひ傳へ今なほ存せり　社頭の東牛久保村ふあり　今第跡田圃となり

ひと甲州源氏武田家ふ軍師と初ひし郷ふ棲で躬龍面ふ耕し　ある時ふ列國ふ漂流して專軍學を發し文武地理を曉し　歸國後晴信ふ仕へ　牛久保を攻ひ其ひ天下九四將の其一人甲州の畫ふ其ひ牛久保を攻ひ其ひ天下九四將の其一人甲州の大守武田大膳大夫晴信　薙髪後改信玄　駕を枉ゐられを顧ふ事三たびよ及び人と屡して筮詩を精好をる事日々ふ密之家ふ遠山右馬助坂垣信賢等將ひを

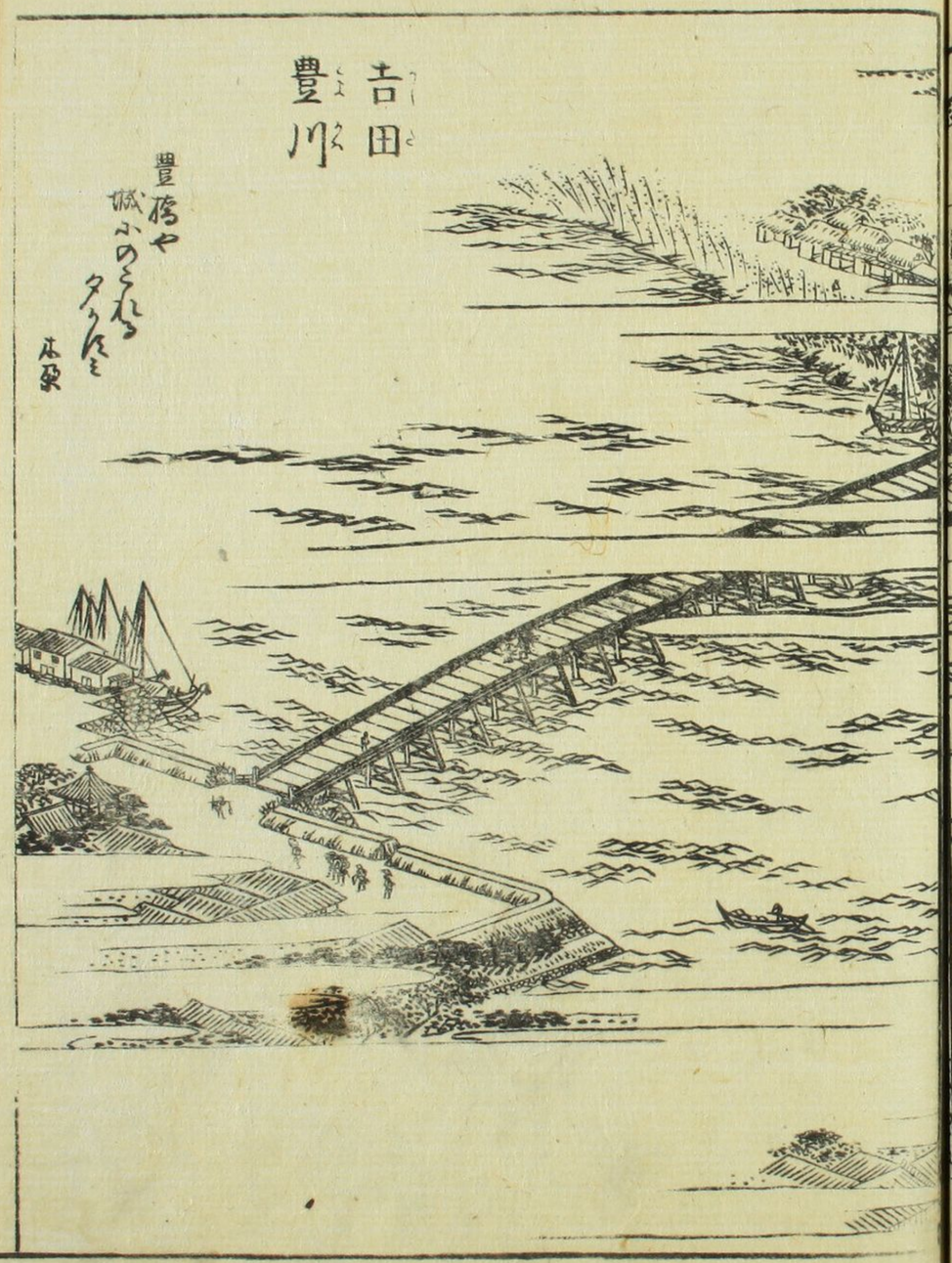
晴信曰ひれふ勘助あるを奥ふ水あるがゆへ再び言ふ復ひ事なかれと宮ひ阪ふ出陣あのさ日數僅ふ十五日の間ふ信州ふ於ひ六城を陥ひまれみな軍師の計策ふ據ひ成人云和朝の孔龍明劉基ふも比せん中甚須名高仆中重治

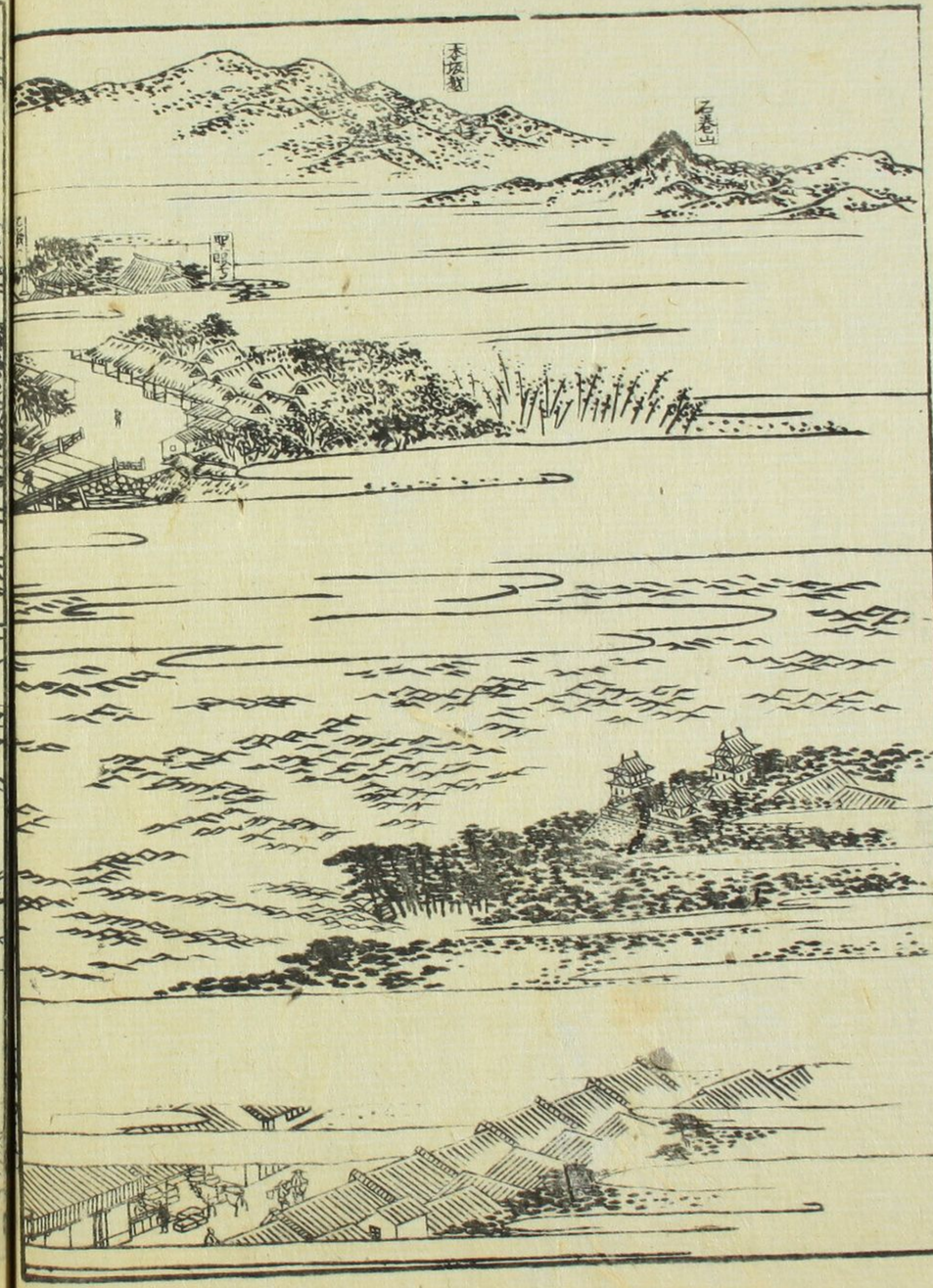
穴山梅雪眞田幸村ふて山本ひ門ふこそ學べへ

砥鹿神社　寶飫郡　諸書ふ飫ふ飫ふ作ふ

祭神大物主命　風土記所祭大物主神圭田五十二束　文武天皇元年始奉圭田加神禮　文德實錄云嘉祥三年秋七月丙子朔授三河國砥鹿神從五位下仁壽元年冬十月乙巳進參河國三代實錄云貞觀元年十月授從五位上二年八月授砥鹿神正五位上十二年八月授從四位上

社說云祭神大己貴命　大物主文武帝御惱ふより勅使の時神託有て公宣卿を以て公宣卿の波爾ふ草庵砥氏宣卿の祭五月四日走馬流鏑馬の形儀ありし本宮山麓ふ東ふ石巫社西ふ猿投社　祭母の里南ふ大洋灘々ふ風吹深ふの地係ほ菅沼織部入道藤茂ふて別ふ當國ふも勢ひ汀のみみのひこ神をれ


吉田
豊川
豊橋や
城ふのこれる
夕ゝ
木梁


本坂越
石巻山

二川まで三里半驛路鈴ふき牧夏小白切てこれを築く

吉田（二河）

紀行

長篠城の迹ひの門あり驛路鈴ふき牧夏小白切てこれを築く矢玉大刀鑓などの痕あり〳〵よれと登半門火口松あふ家所〳〵ふるき代々の諸侯連綿〳〵あり又関小万ノ墓碑下賢菴院よあり由緒不詳

古へのさまの名殘れるなどうち〳〵都の吉田わたり福ど

同

同

菱さてもよしや吉田の里ふるき名を

慶長十年の春より一田のくりもの

めうひてまて稼うふたりうち一田の面ふちり紅葉のてりは

小姓宗甫

迎接三藩院信尹公

豊川 城下の西八丁よあり豊川私名鈴出三州三大川の其一と稱の長百二十間餘

北條氏政

三州平波湊外山氏所

吉田の旧名牧今橋といふ比後小とりてのち名ふるく〳〵あり源い信州の山溪とり滴て長篠の裾を流豊川の里よ到〳〵豊川とよ比後ふるく〳〵あり勢州白子川崎へ波舩あり海後二十四里

又本

小野於通

富士紀行

物人の矣をさふおよひやどりるのはあすやさらん豊川のさ

在笠丙大臣

丙辰紀行

ひりはふるいのはいとよあり十よ川や於くうつ波のまとそぞん

雅世

行 何日 霧 相 送 數州 風 馬 過 曉 霜 上

龍 横道 路 中 川 流 無 盡 夜 人 物 有 西 東

一枕還郷夢家書久不通

雜止

牛頭天王祠 神明 八幡宮共よ御供肉よあり三月五日

例年六月十四日若田本町上傳馬町の両町よて揚る高十三間巾三間

放花炮 六月十四日若田本町上傳馬町の両町よて揚る高十三間巾三間立物とよ

それふ火炮くりよ何の為よあれふ夜よ入て揚る見物の人〳〵大勢集驛〳〵

甚外町々の花炮数百あり〳〵群集驛〳〵

○翌十五日祭式 吉田五箇の寺院より十四五人の童頼朝の出立とて金の烏帽子狩衣直衣太刀佩〳〵馬上之十六人の八幡のういどり馬上又十六人の帽ほを冠り猿内ふて走馬あり中ふ島山重忠と名乗るりあり射笠ふ綿の陣羽織を着〳〵背ふ幣を挿を同ト袋を結付る袋の編笠湯衣を着一笹ふ錦頭を救百人〳〵馬上之重忠てふふの頷至の技浦のそ錦頭を多〳〵拵らるれよ拵ふとり又逸とり太刀を敵武人同衣裳ふ塗笠被里覆面一拵〳〵古雅の体相〳〵の陣羽織小鎧袖笠湯衣を着一笹ふ提燈とのひ付〳〵数十人同意ふ甚唱歌よ〳〵

天皇 くしふ人や何仏 おて法一寺の日本一の荒神

あろか橋本 塩見坂 名所〳〵の花をみさいる

これとそりつくし〳〵偏〳〵都て賞

然神祇園會ふ投て多い公事根源よふ人〳〵神代巻よ諸の神

罪を素尊よ帰こ千坐の置戸をとりく促微り髪が抜爪と抜ぬそ

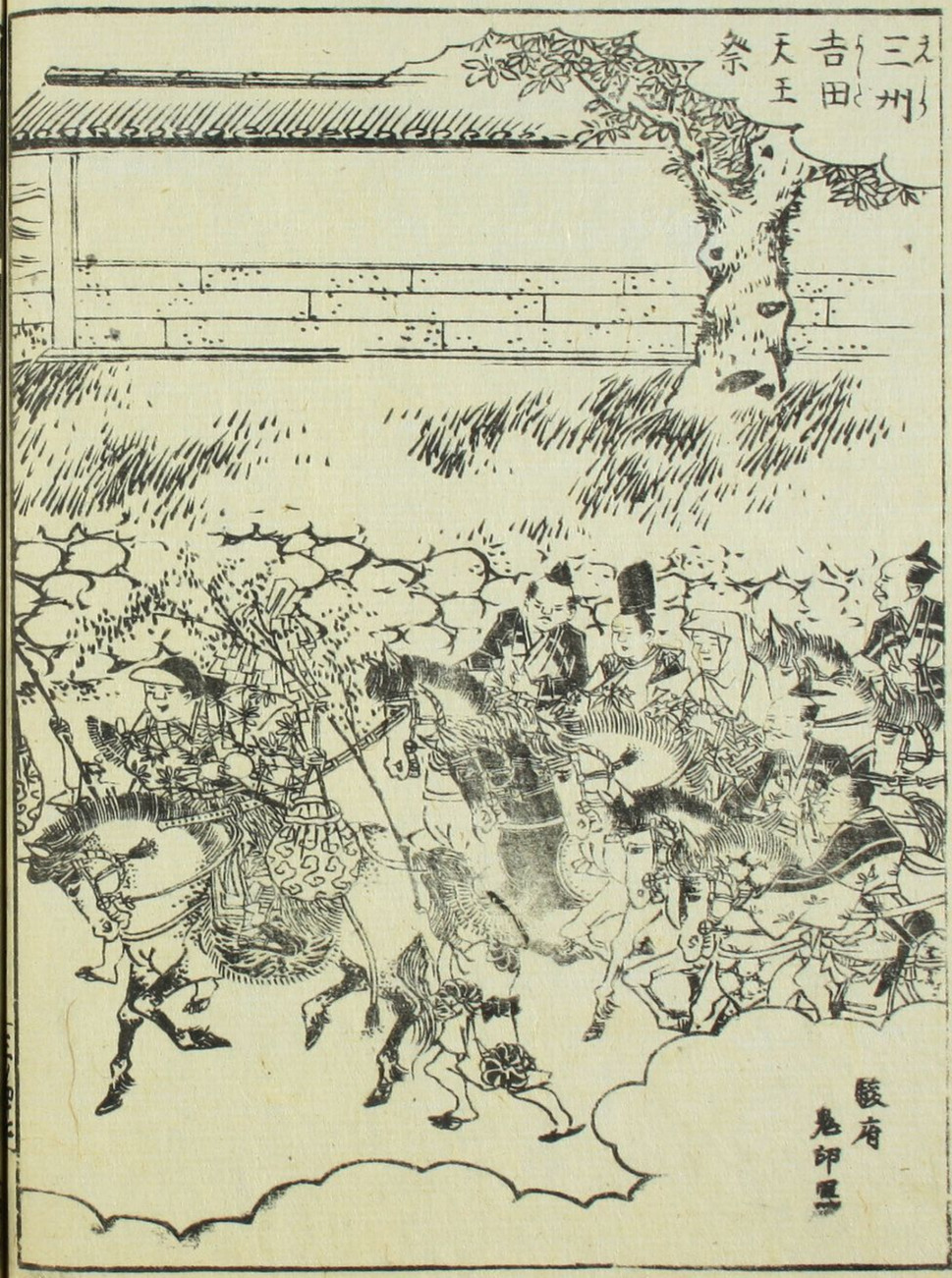
そくとの具とくしく又除ひとの心ゆてみそさこいひ御抜川しもり

人の形を作まて興まるい形代撫物うりよ

伊弉諾そ檍原よて祓ひ給ふ神事い源氏東屋の巻みそうふる



六月
十五日



三州
吉田
天王
祭
駿府
鬼印里

煙巖山鳳來寺勝岳院　三州設樂郡門谷村の山嶺にあり
天台眞言の二派なり　開基利修仙人一刀三禮の作　日光月光
○本尊藥師佛　長さ八歩　開基利修仙人一刀三禮の作　日光月光
十二神將　四大天王　安倍秘佛
○神祖御宮　諸堂の上方にあり　御宮殿　莊嚴微妙
別當職　天台學頭　松高院

拾遺
ふるのもりふさ〴〵の櫻ゆえ　人の國ゆくらめ
紀氏之店
ふるへの神よ今ぞ心もとなき

送二爽鳩子方之一三河
憶君奉レ使向二三河一路　入二幽関一蒼海波　物茂郷
杜若水寒芳蒲峰霽テ白雲多　置酒誰ヵ聽ン奥麗歌
吹笙幾訪鳳來寺　嵩山少一室　定テ如何
聞說登臨名蹟徧レ嵩山　權現
○鎭守二社權現　中央熊野權現　左山王地主權現　右白山權現
利修仙人の影子心月坊祐仙勸請
○六所護法神　利修仙人百跡圍従　御請ス
香華役棒ク隨一　因茲勸請ス諸神
○開基利修仙人堂　此堂ハ飛彈の匠ら造ル　飛彈の匠ら造れるといふ云
堂ハ後左多ノ靈長二の國七行堂
○常行堂　本尊不動佛　左多ノ靈長二の國七行堂
造立の其一堂とぞ傳ふ

○二層塔　源頼朝公の建立　極彩色
常行堂と此塔を普の靈地と定めらるゝ傳ふ
○鐘樓　樓門　諸堂の次第圖畫よろしく樓門の額ハ光明皇后の御筆にて
風祐寺と書せり　左右ハ金剛力士
○名跡題目石　樓門の傍にあり　弘法題目名鐫し慶安四年
篠原氏建るされを弘法大師の投筆と称ふ　清人其ほ
○八王子祠　蠶の門谷町にあり
生土神
○奥院　本堂より九町許　山奥ふかし
白山權現　不動尊　此
○煙巖山　本堂の西に高くそびえ　巖上に立昇の如き名とぞ
○勝岳院　本堂北乾に當る　利修仙人の影子心月坊祐仙
仙人といふ名あり　又猪
仙人の作られし不動尊又役行者の作りゆふ不動もあり
一宇ハ安置せり　巖の岩面に
○瑠璃山　奥院　瑠璃の壺を乾に高くそびえ利修仙人
○隱し水　西谷にあり　利修仙人の加持水也　旱天霖雨に増減なし

○高座石　○巫女石　傳よ本堂の乾の方よりあり利倹仙人山神の招請
巫女天像りて聽聞し仙人説法し
行向ー〻歡喜セー所を巫女石といふ
○尼行道　仙人ふもとより女人の登り給ふを
傳へ聞きされど尼嶽と岩頭より
谷に尼谷といひもそぐけるを
嶽の修道となり
○行者帰當山の嶺より林の方大堂一所道と役行者登山の時岩路嶮く
登りぐるきべ本道よりも到り利倹仙人に遇ふ故に名あり
○葛橋當山のもよりむー〻渕
橋落ちより忽然そー〻葛数百生ふく
勅使役公宣郷登山の時渓川法水ー〻
勅使役公名あり又今の橋義本の
おとりー〻ゆへよ義橋とも
○篠谷南の方ふもとむー〻修驗姫當山の本堂佛像を造信ー
仕篠谷に棲ー〻日毎よ説ー〻示現仏衆り十二座の修驗役宿初
ふー〻倶よ當山よあり
○山伏堂　○馬背　牛鼻　倶よ當山よあり
それも嶮路ぞり
まだ當山い推古天皇ぜ勅願ふー〻利倹仙人の開創と其比上宮太子
攝政ー〻ふ時三河の國司奏ー〻て日桐生山よ桐樹あり根傳神代より
ぜ巫樹と其高ぜ四十九尋虚洞あり大室のぬー〻龍其
虚洞ふ棲其西の枝ふ異ふ棲ふ其の凡八恐尾の尺丈餘全身五彩金翠ふ
ー〻啼聲雪々ー〻ふ〻まで其名を知ら〻る一日二尾羽を落ち故ふ
献まふ其洞中よ併像あり金色よあり
攝政ー〻ふ時三河の國司奏ー〻て日桐生山よ桐樹あり根傳神代より
金光ありと奏ぜ古ふこれ仏國司旦ー〻
蓋階下神皇の紀を開化儒併の通仏弘ふの茶表ふ彼佛像ふ瑠璃光佛あり
源代龍去ふ精舍と脈ふ〻同市村学校を蒙りて利倹仙人當山七年損仏
一様代て業師日光月光十二神將四大天王ふ彫刻ー〻巌上ふ安ー〻
是ふ皇后の驕ふ驕て空中を駈のふ
古ふ傳ふあり故ふ當代業師と称ぐ厥后文武天皇御悩の時業師祓
を勅使ー〻て仙人を召ふ利倹仙再三辞ー〻ふも勅命遁れー〻參内
ありて加持をなー〻れ御悩忽平ぬ其時天皇仙人の意願を
勅問ありふに答て云烟霞を栖ー〻青苔を衣ー〻松實を服ー〻て名利を
親ー〻まされば身ー〻ての願心ふー〻國家安泰ぜ祈ー〻て佛堂ぶ建て尊ぶ

と安置せん事ありしに本來此額をもと奉りし人なれば感のありて今宝三年遣唐使其後光明皇后此御筆にて風來寺此額を賜ふ又青赤黒の三鬼ありて常ふ利修仙人隨従せり仙人入定の時此三鬼の首を某師堂の下に埋こ高山乃守護神とそ

元和年中本堂炎上の後遥ふ折拾石樋こうこれ出こ高山の惡僧初て三鬼首をもとのごとく封じて藏め埋しとぃふ宮前に利修仙人の新へ

敕使公宣卿登山のおり本宮嶽(鼻ながく赤面)に逢ひ公宣卿驚き

公高山へ送りもふ公宣卿驚き

雲務や海山のものさびしさもみぢ散る音ばかりして

本宮嶽の神傳ふも此事を記せる毎年月三日十四日に若菜粥を祝ひ獅子舞

田樂能五番を節捧仮振も此三鬼の面縁とぃふ抔開山利修仙人原山城國二荒

里賀茂間賀都岐麻呂のふし欽明天皇紀二十一年庚寅四月七日ふ越こ利修

童子と号く成長の後忽然こ此山嶺ふ登り玄中に五葢山の長狄仙人

ふ謁こ千葉の實を授かるゆふ其峯ふ千壽峯と號こ其後万葉ふ

保ちろるより万壽改と云所今ありの時勝岳の深窟ふ入定こ本若氏の出世を俟とぃふ巌窟ふ泄水あり今に時々振旅の音幽ふ聞ゆるときふこれ武陵ふ人桃花源ふ遊ふ似たりまつ江府ふ歩

あふ治ちろろく秋葉山より登りて山路八里を盡てさくふ到る京師より凡

もろもろ御油の驛ふ端こり入こ高山門おまで八里餘こり

篠田 大木 半ばまで武里 長山 小岡 柿木 東上 中村 御油 上宿 八幡

野田 新城 此所迄四里半十六丁 宗高 野口 諏訪 松並

萩波 新間 門々 清井田 大見 雅現の路

瀧川 豊川の上流 追分 門谷 風景最もよき所 鳳來寺門おふ門谷町こく

旅泊こありそれより橋をわたり樓門ふ入こ石階幾登る事数こ九町ありそ

町毎ふ石標あり左右ふ老杉翁欝こうて旭の出る事迷々こうり陽施のお側

ふも僧房連りて実ふ眞言の一流あり一会三十九箇法を修し胎金兩部の觀

磨會次第一次第ふ究れば寶冠圖金塔神窟佛龍玲瓏こうて壯觀こうり

直こ王維ぅ併を好こ山水絶勝こうる清涼寺ふ比して參州ふ名を得る

才一の名刹おろべし




鳳來寺
東照宮



石巻神社 八名郡神郷村にあり吉田より壱里餘東に二川の小さ延喜式内
例祭正月十五日九月十六日

祭神大巳貴命 風土記云三河國八名郡美和神社圭田五十束
所祭大巳貴命也 齊明天皇元年乙卯始ヲ
奉圭田加神禮有神家巫家云云 蓋此社乎 文德實
録云仁壽元年冬十月授參河ノ國石纒ノ神從五位下ヲ
毎歳正月十五日年穀占の神事あり神おこて粥を煮くて十八本の管に入れて
粥の釜へ入其管の中へ穀粒の入るさはにく其年諸穀の豊凶を占ふなり
穀占の神事は歳内掘河泉の間にもあるこの内牧罡神社掘州為上郡
安満社等せる名高し

粥占もめでたくしかと大根引

三州吉田 丈夫

窟観音 吉田より壱里半東大岩村山間にあり
亀見山窟堂と号禪宗
富士紀行

君が代をかけもしられぬきくれ石のみな大岩山と書まて

本尊千手観音 行基の作長壱尺寸天平二年造立といへり初は岩窟に安れ
堂内の額施無畏と書を寛政六年播州姫路酒井侯
自筆して大巌堂後にあり高サ八丈幅廿丈餘岩形亀に似たり故に山號
喜捨れ 岩窟あり又岩頭に銅像の正観音をあれ明和二年
江戸谷中より寄進を
遠境より鋒にしゆる
白須賀まで壱里右の方に田原山遥にこゝゆる

二川 三河 在詠

玉くしげ名ふたらのあけ四方がきれも三河のうちとこそ云け
國をみ四方里はふたらはあはれがいりはかんなる 法中

光彦卿
清人書


巖窟観音



一之遠堰川　二川の東ふ流れ来り小松多く遠州遠堰川と称す

猿馬塲　堰川より堤左右に猿馬塲の茶店ふ相継ぎ多く

曙記　高サ十丈余巾二十丈許猿馬塲と土呂称す

海さの松蔭を行く〳〵遠望せバーふ東の山のごとくして富士の山ふと向く

手に折取るふけもなく山容ふりく〳〵うつくしき姫しくおもふれる

白砂のいつも浦ぐうらをひく

荒井まで十里共いふ町　又白砂ふも書へり須賀の助字ふ据須賀也須賀也

遠白須賀　所をいふ洲賀と書へり須賀の助字ふ据須賀也須賀也

初メハ汐見坂の下ありえ猿馬塲の茶店ふ相継ぎ多く

白須賀といふ所ありうつくしき浦ありえ白砂ふ

白洲賀濱　今うつくしきふ白砂ふ

濱の枕詞ふ註ふ云ふ國

續古今　松ケ下のいつ海ぞやけて白妙のみを別れうく出る旅人　九條前内大臣

汐見坂　白砂の東の坂路ふ汐見坂ふ眼下ふ絶景ふ遠州七十五里の大海眸ふ遮り弱水三萬里の彼方ふ蓬萊の仙山ありふ漁舟ハその像よみくかくれ浪ふの鵬溟のごとくみるけ汐見坂の眺望ふ

富士見松　汐見坂ふありふれバ富士ふ見ゆるふめの詞より詳ふ

名寄　潮見坂松吹つゝ清風ふそ

富士見松　人をそ松ふひとゝもある浦ふ坂ふ

同　古ふ人ふ

同　言ハれふ実ふ出ふるふ坂ふ

丙辰紀行　天地当豆識幾層瀾舒巻古人方寸端

浦目不遮潮見坂大鵬飛盡水漫々

又

波浪雲天候一色東南濱海更無山

聖門有一街人何敢望潮見坂停馬看

高師山　高志或ハ高石と書ハ遠江紀ニ白須賀より後ろ〳〵の山名ふそ

又或ハ云高師山ふ今ふ天神祠ふり白須賀の四まで續ふ一山ふ

海をの眺望旅中の勝觀ふり

新勅　きこえおる松ふるかぜ寄せて哀猿の山の麓ぞ物悲しき

續古　松ふゞしふんでふ後ふ山ふのとふめふる濱の松風

風雅　ふゝ波の高師の麓より海ふまで吹きおろす濱風ぞふく

新千　旅ふゆふるたゝ山ふ夜ふ夢のよふで旁のよふ

足利學校教公

新後古
菁屋にて日和ハ雪紙もたりし山ゑふ泊やゐてゝゆうまし　前中納言雅房

新拾遺
演路なりおまへられた高師山峯まで同し松風ぞふく　津守國冬

同
秋風ハよりて清月の高師山帰りの浪の音ぞ更ぬる　叡蓮法師

夫木
高師山を清かにしゆるふ下の根を行ゆる人ハ多くそ志ゆ　氏部公為家

同
秋風ハ湊をいつる友船や高師の山の梢をかつ　西行法師

同
風ふけば高師の山に白波の雪とかつしく誰かしらん　慈鎮和尚

同
高師山松ゆるこの松風やふもとの里の磯浪の聲　雅賢

同
高師山夕しへなんてゝ屋まとゝへいふもとの浜に塩の焼ゆる　為家

東関紀行
冬河遠江の堺に高師の山と穿ゆるなり米に鉄かゝるなどに谷川のなりれ
落て岩瀬の波まとゝしく穿ゆる堺川といふ
岩津をひ駒うちワたひ谷川の音も高しの山にきにけり　源光行

十六日記
あかし山もきえ川うみ見ゆる浪ぞいとおもし後し満風あれて松の
雪ぞ起まとゝ浪いと多かし

ワのためや波もたりし浜ゆるん独のみなとの風やゆきも満て　河佛

橋本
白菅より三里許東にむかしは宿駅なり
名所多松
浜名橋本なり古人の紀行古詠多し
たりし山松ハおりゐる鶴の橋のとうけて月ワたるうな　五條内府

紀行
浜名の橋のとに月のいとおもしろき紙ゆへて
うはしのてこゝろしづかに見るべきとうとても波の月さらく成　増基法師

女谷
橋本にあり建久元年右大将頼朝公上洛しまふ旅館の回蹟也橋本の
長より遊女群集も故に此名なり一説に頼朝公の家臣多く止陣するに
ふ所に所長屋といふ土人の俗説にしてあるにしたがひ甚頃右大将に籠を得し
遊女なりしが頼朝薨じまふ後貞操にして尼となり妙相と号し一寺
建て高野山より本尊を紙ゆへて
今橋本村教恩ちに此本尊なりと也
東鑑云建久元年十月十八日於橋本驛遊女等群参有
繁多贈物先之有御連歌
たゝ我ハ夜川のこく続こしきまたや　梶原家時
右大将頼朝
同書云同年十二月四日天霽前右大将家令下向関東
同二十日庚子橋本宿
同書云嘉禎四年二月七日将軍頼経公上洛之時今日
着御橋本驛陸奥太郎實時宿舞澤
同書云建長四年三月廿四日宗尊親王鎌倉御下向之時
今日橋本驛有御宿
荒居古老遠湖記云橋本の遊里紙花香町といふある人の家に
東海をよみて浜名の橋本の名も繁しん花の番の町

花香町より今橋本鄙福寺の東に
非人小屋あり今ハ無之町ニ成
風爐の井　橋本長者の屋敷跡名水ゆゑ今橋本の村中民家の汲取場ニ成
角避彦神社　延喜式内名神大明神と称し橋本村の生土神ニ
文徳實録云嘉祥三年秋八月波申詔遠江國濱名郡
角避彦社列官社
湖水所レ繞擧レ土頼レ利湖有一口開塞無レ常湖口塞
則民被水害開則民致豊穣或開或塞神實爲
之加崇典爲民新レ利從レ之
遠湖振裾記云角避比古神社の大湖を見渡すに一口の開塞あり是
則神のなせる事と云傳へ又應の門記も記せり然るゆゑ濱の開塞ハ
神ならん人ハ定め難し角避彦神とハ古き
紅葉寺　橋本の西にあり中比ハ名ゆゑ紅葉殿と賞しと云傳へ
せし故本堂ハ今ハ破壊再建せしと云濱名が持導
山氏といふもの領主の頃ハ盛なりしと云民家あり又東福寺天神の祠あり
うしろハ内山村あり麻の池鯉田とあり
濱名川　今切より流れ白菱の東帯の濱より流れ古ハ遠湖と成又池ありと
海へ入今ハ田となり濱名川濱名の夕汐ハ松原めぐる海士の漕舟
小宰相
濱名の夕汐ハ松原めぐる海士の漕舟　中務乃々

荒井古老遠湖記云濱名川を渡りて岸あり山野の衆流此川に入る帯の濱
へ流る湖水靜かにて小舟ハ掉遊ぶ西の方へたより流るゝ
濱名橋　今廢せ橋本村をむかふの方へ渡る小松原あり
三代實録云　陽成天皇元慶八年九月朝遠江國濱
名橋長五十六丈廣一丈三尺高一丈六尺奥観四
年修造歴二十餘年一旦破壊　勅給二彼國正税稲
一萬二千六百三十束一改作焉

拾遺　橘忠兼
白波の立つるうき濱名風ふくごとにあるる浦の浦人
續勅撰　前齊院尾張
浪つゝむ光もさそふ秋の夜の濱名の橋の夜の月
濱名橋　百首光俊
名ばかりけふ濱名のそれをだに渡らで旅人
同　前関白家長
たゞ一山夕嵐ふれて葉を洗ふ濱名の橋は月をこそ待
同　政村大臣
風ふけば浪もさそはぬ濱名の橋は月をこそ待
爲家
立ちかへる濱の秀は明くそ見ゆる松原ゆ出づる月のさやけき
宗尊親王
濱名
うちつゝく濱名の橋は曙ふ一むらくもる松のうら風
大江廣秀
新拾遺　津守國道
いくかへと入海をくゝりて渡る濱名の橋は月ぞ待ける

旁もとおく須磨の関屋も程近く有明の月も猶あはれまさるべき浦の
ありさまなり

新古今 下 羇旅 寂蓮法師

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ

源氏物語 須磨巻

いとど心細き空をながめ給ひて

十二月廿日記 土佐日記

廿二日の夜なかばかりにやどもの声もせず

あの世をかねて思ひやるもかなしく

橋本記

南は海湖あり漁舟波上に浮ぶ

つくづくとものわびしき洲崎遠くきり立てひぐらし鳴く

ちどりふむ松のひびきも波のまも須磨の関守いかに夜半ぞ

こまる君ひとり夢を驚さぬぞとのみまもりあかしの浦の

古き名ぞしのばしき須磨の浦風

行やまぬ旅ぢいつしか須磨の浦に袖ぬらしそふ秋の初風

須磨の浦波

須磨の関守

須磨の浦風

須磨の関屋

須磨の月

須磨の旅寝

須磨の浦千鳥

須磨の浦人

須磨の浦松

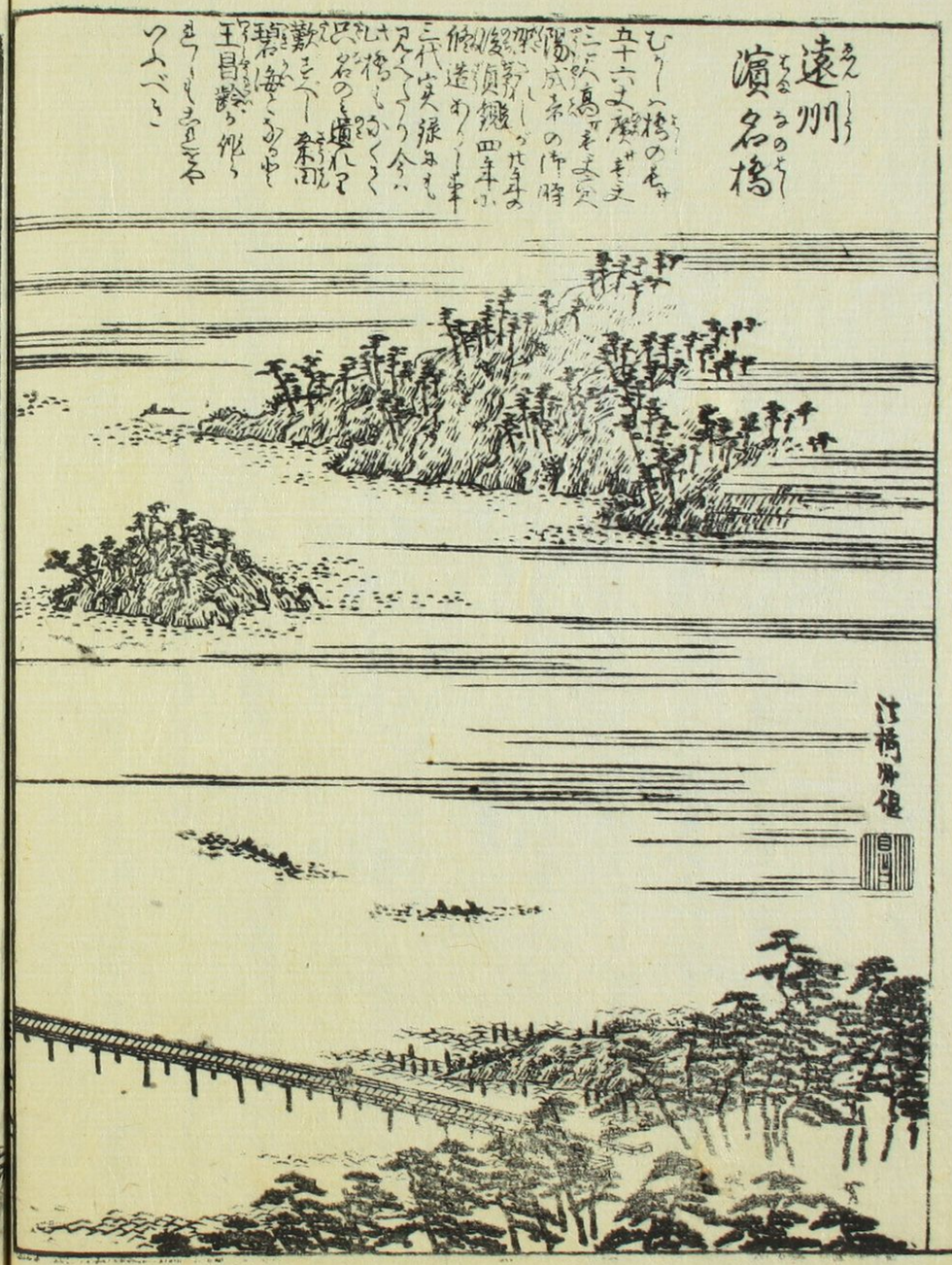
須磨の浦

須磨の関

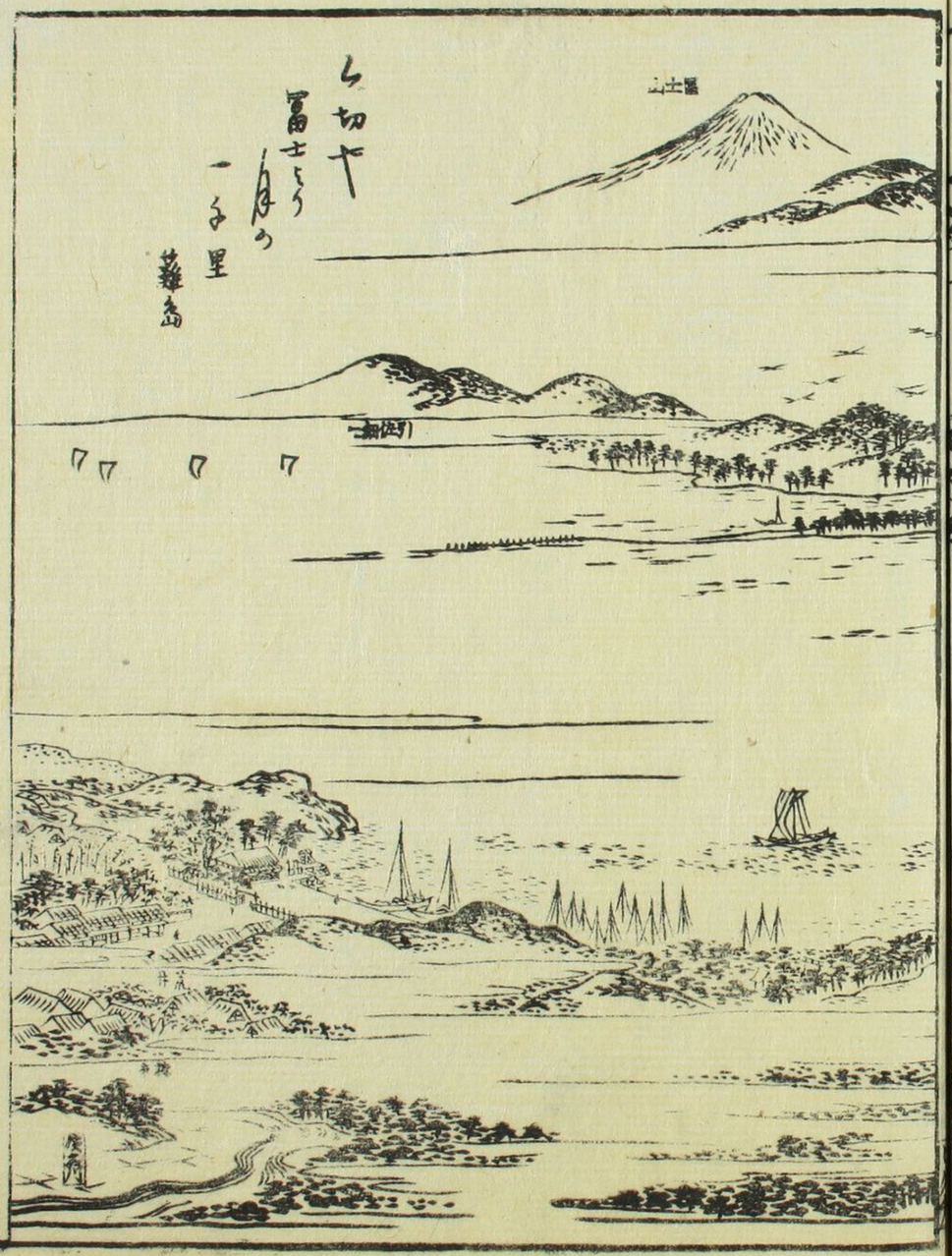
須磨の関守

須磨の浦波

遠州濱名橋







山切や
富士より
一千里
蘿岡



今切

荒井（遠江）

荒廃又は新開地とも書く。旧名猪鼻驛太閤今の荒井の方城跡をさん山地より京師へ通ずる東海道第一の宿驛にて是より海上三里船場ふ着御機嫌よう渡舟にて着坂まで海上三里船場ふ着御機嫌よう渡舟にて着坂まで

續日本紀云　淳和天皇天長十年十月遠江國濱名郡猪鼻驛驗ありて以來稍久しく今依國司言遣使撿其利害興復ス

延喜式兵部省云遠江國驛馬猪鼻十疋

猪鼻湖神社　延喜式内鎮座今さぐるに振根記云濱名郡ふ猪鼻湖神社あり社歸よりこれ等の上に鎮座ところ〳〵考ふるに神いろ〳〵ありて濱辺の歸社上よもー一社宮永四年猪鼻湖の神こゝに遷座ありしの時遠江の國司兼勅使として祭ありしが其後又遠江の國司兼勅使として祭ありしが其後又遠江の國司兼勅使として祭ありしが其後又


遠湖
堀江村
舘山寺
遠州ゆくく
風景第一
の掃地之
水神


大穴
舘山舘山寺

寶樹菴　赤巖



貞應海道記

橋本ゆくに川橋のつくりより行々たりかへりこれを赤にしたるなれば其ゆへ
なぶりなぶりかへし所に青松の枝はあまむきすぎなりしとぞむかしよりこれをでも
湖上遥にうかんぐなるのしはれの顔に老たり西にのそれば湖海をなく
そびこりて雲の浮たし風のまくこにつたれ所にのりしはれはかもしも是も
おなじ名れども湖海の淡鹹は氣味ことなり

歌枕名書

高師山さへ来て見れば淡松の一もし遠江海の入海　愛融

むかしは森沢のあたりより淡名の橋までに浅ぐ結くみとりの松生はらなりあうみ地
海を居ぐてくれ一筋の大路ありしと見へたり古老の伝に云むかしは橋本ゆ東福寺
なり木履にて森沢の町へ齋にゆきし里をいへり神仙傳にいへる東海ゆ三たび
桑田なる事なりとは此あたりの事なるべし

今切　後土御門院御宇明應八年六月十日大地震しく湖と潮とのあいだ
きれて海と云とりに成て入海となるこれを今切といふ其後
後柏原院御宇永正七年八月廿七日堺の貝出て山崩れ川埋れ森
坂の原ゆ破り深渕となる又其後元禄年中地震津湊ありて海上
あらく風強くして波高く渡船の災となれば室永年中官家より
有司来り今切の波頭に数万の杭を打て逆流をせぐ也又
森坂の方より花へ海中半道の間波戸を築きて渡船の風
波を穏にしめきゝ然どくめれ自里なりしむ

丙辰紀行

遠州荒井の浜より奥の山五里ばかり海となりて大船も出会むかしは

羅山子

山よはくさたる陸地おろしが中に山ちゝかう并貝おびたゞしくぬけ出て海へ入事甚遥かに其深かく碧なるよう〳〵古老いひ傳ふ我國の伊勢諾伊弉冊の産給ひ大己貴少彦名の住給ふと云ふ直指

いざ行ん心もとゞろ山と巨霊が擘開〳〵給ひしあや

一葉庵舟寄旅泉潮波通信遠州濱　蓼山

海山何借巨霊手我國元來造化神

濟北集　遠州橋下作

松根沙上此盤桓且以脚悲換目歟　東福寺　虎關

左海右湖同一碧長虹併飲兩波瀾

身延紀行　荒井のつゞら富士山を見つゝ

碧天雪白白雲間走　率児童亦仰顔　遠州　元敬

東海初遊多少客富山不敢向何山

幻住庵や寶永の初也云

角避亮の神〳〵あそん淀名の湖れ名称之事〳〵是より淀めぐりせめと舟漕廻さゝ〳〵小人見乙若村振をいふをよめる歟

小舟をつくろひみく葉い海よ秋の末れ葉ちるやあり　中略　とうく志うち舟い能こぎ廻の淀よつきく本興寺よまうで中比庵ち并雅康々ものの法華堂の杜よ書付のふみ有

まびま須もいつもの里よゝそてうく

打ぐうす寺よ入多年二町許左よ双樹の桜ありたゞはのまれ生田の杜れ

若よ御ぐうり門よ常霊山の額とのかけ〳〵しものの所統の常立霊祐ち山乃

山やさうつうち統と番ものの理　蝶夜

仲のおいまる堂も僧の筵れるもろもろ

なる室よれさうさ法〳〵て生ぐうふ所経よりあるを　遠州入野　方垂

おぐうふ　おそ　傭経もよつくろあ並

汗浦や高砂山れうろよりとうやれ店の濁い淀の松ももうくく

波ようこうそ死て松の梢をあらふ白波とそふうこの風をひく船の汐

こそうく入出の浦つゝ〳〵西大寺よのぞる山な渦山とつふ瀬よ

のそうたる太田の江左大和波の江〳〵う寺乃おの桜ち

くふまは　おをいとだうまこる公見下すに花の末れる江

波の立のれゞいの川辺松梢いろ

見るれ〳〵う法海醍醐の花よ　岩掌

千貫松といふおくう松たくさ　礫岩とつふちひさき浜よ

つくさゞうれ潮の中よ石投こむみうれを眺く舞

鶴の本立ろ死中よ多れ〳〵女性天女の中へいまそよ江の瀬の

中よ竹生島を見ぐ〳〵さてうよ奥のかさ松浜名ゞとつふ嶌山せ

まう〳〵中ふちのうよ船をうけるぐうよ船を出入多ぐうそ松廻汀

ほくれのふうみのおくれこそ並えおれる　和まく村里よ

ふる年多く渉りうをのやは伊勢の神領称戸の庄ありし

その館波とくうるさ神明の社ありし岡本とい里よ神垂をよと

いつふこのあり　そう寂よそうてうくうく

いをみ〳〵一日の中よ麻をうみ布よ織うく伊勢へまうるも

えゞおれるん神衣まよ三河の赤引の称用糸とうく所衣機能と

いひまそ伊賀屋敷浜三河遠江うちの作衣料おゞ〳〵今も公うた史が称年

米たまるとうんまこ浜納至てうう公よ〳〵そてまうる

大福摩訶耶寺とい当あり荘園給〳〵ゆ〳〵ある古寺ともうりまこ

紀代といふ里の名あり和名鈔に浜名郡に驛代の郷あるをいひおやされるるゆゑなれと里人は頼政といふ化粧水射ると傳る勤賞に賜ひしなど語れるいひ傳へとゝもに古き名所の料にも書られし地を花垣の庄とよべる半ばもありその垣ともうの猪鼻井伊谷の名あれどさいひしうやうやうに三ケ日此里あるいはゞ猪鼻の間あるべし三ケ月ともいふ昨日あるとは聞ざりき

引佐細江　千載　東紀行　冨士紀行

遠江の引佐細江のみをつくしふかき心を我もたのまん　清濱

渋谷と染むる色をみをつくしほのかに引佐細江とを見わたすかぎり　光雲

かくて引佐細江のあたりも海のごとくなりぬ

[illegible]河国記云堯孝法師の[illegible]

[illegible]記云堯孝法師の[illegible]

[illegible]記云遠江の[illegible]

[illegible]記云遠江の[illegible]

[illegible]記云遠江

遠江 舞坂

舞坂より浜名の橋わたりて新居の関所あり 此間海上一里半 新居より白須賀まで十三里 此間大洋よりの風波烈し 三州 吉田まで海路七十五里 こゝを遠江灘という 荒井より小南を経て二川 吉田 豆州 下田まで海路 舞坂より新居

新居のそらとこの浜松所よりさかりて西を海の湖 ちり 錦を織草ぬきそひいでゝも 塩風捲ふき信夫もぢずり 誰ゆへ みだれそめにし われならぬ 浦人の袖 そのふり松 末えて 幾ひさしくも 経ぬらん

見ゆる漁人の家ゐどこのまでも 藤原 定家卿 来ぬ人を 松帆の浦の 夕なぎに 焼や藻塩の 身もこがれつゝ

なびく浮雲 秋ふけて 月もさやけき 鏡山 いざ立ち出て 見ん人もがな 遊行 一遍上人 時宗

本像は観音 松うへ 海を御堂 うちふき返す 浪の声 さびしき秋の 夕まぐれ 幾年月を 送るらん 鎌倉へ下る 筑紫人 色とり〴〵の 観音の 霊夢にて 御堂を造るべきよう 心の中より 出ぬれば 久るふり御堂 松造り 久るふり人多く参る 今もそのふるき御堂へ まつりとれば 香の匂ひ風よはゝそ渚〳〵もちろの花と 香ぞあざやか

ふり顧書とも 海のおもしろくつゞるもたのもしく おぼえ〳〵

西来寺 みいろ 来迎寺 浄土宗 光行

馬郡観音堂 舞沢の東 馬郡村にあり 土人 ニシホリという 大悲院と号 左の記よし 定朝作と云 長さ三尺余 古松あり 枝地より 斜に這ひ又立廻く 久るふり御堂 松造りとれば 松をもて 観音の像を 作りしとぞ 奥州 伊達 秀衡の室上京の時 そふ建立ふ

音羽松 海道の南小沢渡村にあり 昔小野小町 吉野 静 此所に来りしとぞ 今は枯木となりぬ

芳林二ツ堂 本尊弥陀 茅師の二師 長吏 二人あり 新

賀茂祠 岡部の伊場村にあり 京師賀茂神社勧請す 式内 賀茂真神社 延喜

甲江山鴨江寺 高野山 真言 鴨江村にあり 古義真言宗

本尊聖観音 本堂 鐘楼 塔 跡 本堂の東 三十三所観音堂 撮待所 等 あり 境内 五智如来 二王門の内 あり 此蔵堂の門外 よりて八王子の祠 あり 坊舎 真言院 藤本院 蓮華院 圓満院 西宝院 真乗院 西蔵院 光明院 妙音院 吉祥院 曳馬拾遺云 〳〵 大宝の比 此里 観世音 現ず 東の方へ 多くの黄金 出現 信ず 是則日頃 信ずる観世音の利生と 多くの人 竿頭長者と 家族富栄 久るふり世の人 竿頭長者と 称ふ 此古跡寺の西 あり




引馬野
金門畫史 狩野縫殿助藤原永俊

見附まで四里八町尚遠州の事ハ東海畔路鈴よろくくれどみてこゝに書ハ

遠江 濱松

濱松のかく〳〵なと云ふ事ハ

旧 波の音松風のたよりふたく〳〵きて枝よりふる濱松のはちを

身延紀行 濱松のほれるさまを過と秋をおしむ風の声そかなしき 元政法師

文集 此地神君建幕營龍蚰陣勢幾猶存 羅山

威風遺韻入松濱畔千歳聲

引馬野 濱松のあたり三方が原ねやの四名と城と引馬城とい城の坤の方ふ引馬野といふあり曳馬拾遺よりくくうつり

万葉 大宝二年太上天皇幸于参河国時歌

引馬野爾仁保布榛原入乱衣爾保波勢多鼻能知師ノ爾

此ほとりく〳〵製沖法師の吐懐篇より引馬野をこゝろ

ろくさしおのこゆゐあ〳〵とこゝろ

式幸のうちよりくこゝにと定むる事ハ非しと賀茂真淵が万葉考

別記を論〳〵遠州敷知郡濱名の駅とむり〳〵引馬の宿といひ基

なの俤の記ふる城を引馬城といひ基

板の上をゆ〳〵引馬野といひしこと

所うゐいひ伝へり此野ハ今いふとそ賀茂氏も

此地のへられを此説伝をべし

遠江も都をとをく隔ぬるを題〳〵

の図もあるもあれいかゝ

又幸の時ふを國の民を召倶

聖をうたふとよみ〳〵もおほ

別記よりくり所理ありとこゝ

十二月廿五日

こゝろひやをく濱の宿といふ

いへ〳〵さとひ〳〵とひ〳〵とり村

さまくふひ出るれくゝめてみ〳〵人をふむ〳〵をそさふ 万葉

それまれのおくぬけを見るさそ 金葉

基房 基房ちかくせども姫小松ふ

まる

引馬野の旬ふ秋萩入乱れ露のまくく蕃 基房

藤川百首 飛人傳雅ふ山ぎはまさ〳〵ふ夜ふ

所集 来川さうおくまの聖のさとをとうこゝをはれ事ふ 後鳥羽

千五百番 姫小松あくまの聖のさとをとうこゝをはれ事ふ 後鳥羽

永享四年秋足利義教将軍富士へ発行 長月立日ぞうの橋幸なたもちて 顕能

ふ人待ふ小遠江ふ待るいふ事ふそあ〳〵ふのほど経つけ待りし空の雲こゝろ〳〵

あらくふりけふ我さほれ出の雲れ神沢〳〵馬の聖辺れ頭巾 義教

永享四年九月
將軍定利義教に
留士成尺んとく
權大僧都堯孝
なと召つれら是
道の紀を書せ和歌
を詠しなふ遠州
弓馬聖の松林
おく宴成僧し
興に乘じなふ
あれより浜松の
書はざらんさと
諷ふも仏縁なり
今に諷々松と
いふ



石田美汀画



諏訪明神社 淀松ふあり初い南國上中流の社 鎮坐あり 弘江二年七月神託ありて 祭神 健御名方命 八坂刀賣命 。社說云信州 諏方郡南方刀美神同躰

社記云永祿年中 國初將軍家始入洛の時崇敬厚く社領若干 門客 門生土神と崇め 門生の君 門誕生あるく 門代々將軍家より 門修覆あるく 神殿 唐ノ 金燈籠 樓門 御隨身 鳥居 御供所 山王社 御神前 末社 悉く

三也朝臣貌閑雅有大度内懐古質外長顕事即有
神道者也又多能雑伎揚他之能平生之意如此矣
宝暦二年六月十四日朝臣年六十八薨之日患卒哀戚
者及遠国葬其社之背面清水谷神祇大副卜部朝
臣謹光海霊神訓云宇那提理通 彌陀慶 是擬所作国寧竜之功也
真福田本貴国少時受訓如父悲慕奈止哉其
嗣乃朝臣爲壽并其妻繁子亦於予善故需墓誌之
備故人其人也宜以皇朝之言予敢不可黙従乱所
有事而勒焉即銘銅鵬保門阿系瑳烏奈毘氏曜斯
弖預例屢之遷哆麼登宝畿與爾寧嗚呵哦佐無刀
預例屢之遷哆麼

明和四年五月

賀茂岡部眞淵撰

此神社ふ載こを岡部氏の古體を賞せんらるゆゑ
又こゝへ此考うへ其の強くしかも
るの意味ありくて誰歌人と點くの路ありまろ

三方原

原拾遺云浜松より龍の方
牧場ありとて三方の原といさゝれども今の百八里の
称え曽三年神亀元年太宰帥大伴旅人卿の
當國秋葉山より西の方多々良飯田のあたりに
玄肉石積つゝ後秀松定書ともいふ文野の城を攻取大猪
三者野坂ふ言坂ふ軍一二俣城を攻陥一十二月廿二日ゆきに
新城ゆ浜松ゆ信玄の本陣ゐ都田のかたへ
退きて
犀ケ崖三方のあれ一軍を出されど犀といふ獣のあるより出く海ま
入ふるより此名をとゞめえ亀年中甲斐信玄勝軍の所
大安寺

浜松看町よあり禅宗曹洞むゝ出現其ゐ諸堂建立後ゆ天正
喜式玉税部ふ出しより久しく荒廃して小刹とぞ
行龍山龍禅寺

浜松の東竜禅寺村ふあり古義眞言宗
高野山末寺格院の末派
本尊観世音

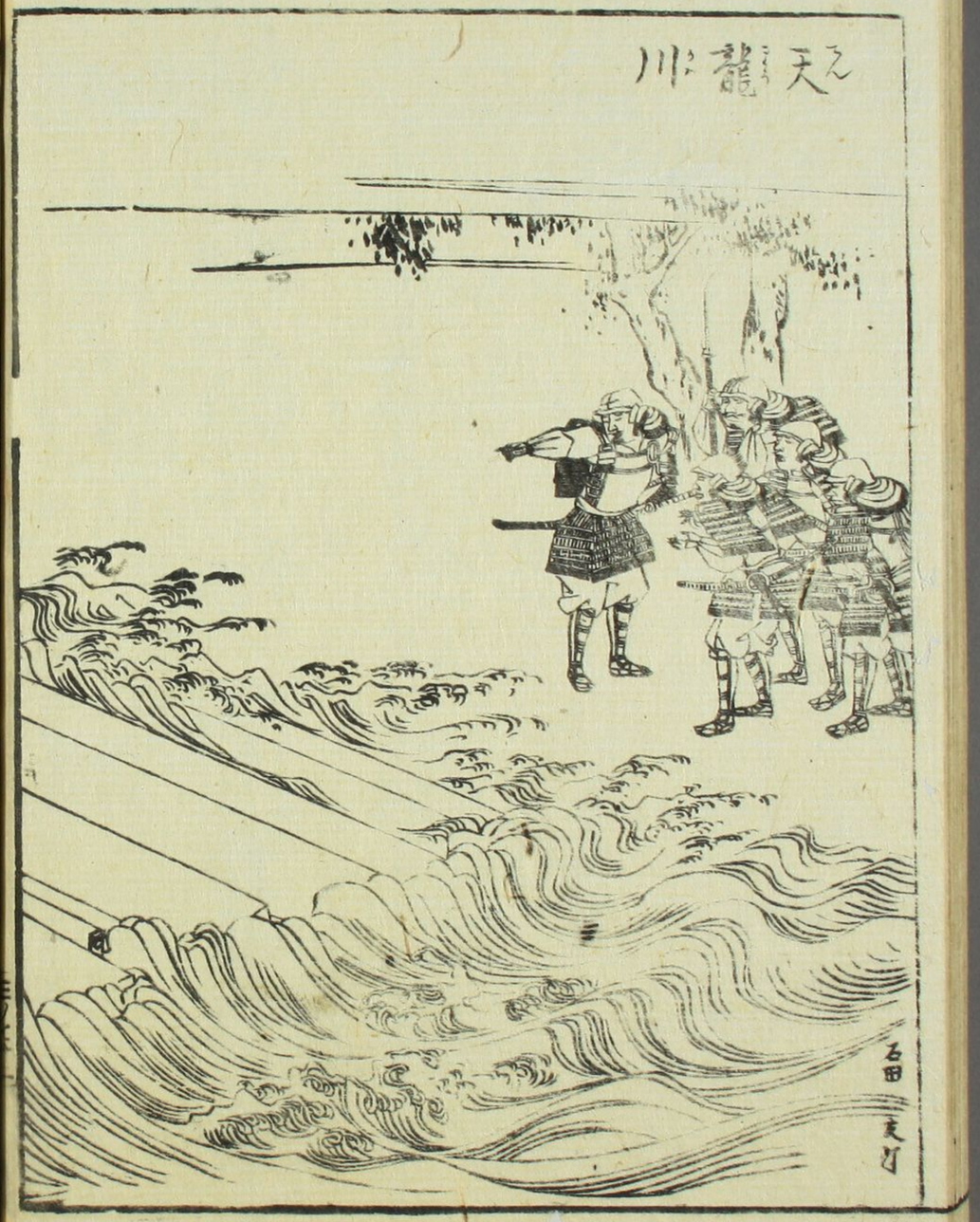
大師堂 経堂 鐘楼 金仲地蔵 水神祠 護摩堂 行者堂 鎮守三所権現 地蔵堂 荒神祠 稲荷祠 観音
のやまあり廟下ゆ三十三所観音ゐ倣ひ造りし舊記ふ見ゆ
西の方ふあり坊舎あり密蔵院理性院の末派
金光院 一乗坊 地蔵院 圓覚坊 宝泉坊 行泉坊 ゆありてはゐの大小
近衛龍山公殘真

曳駒拾遺云曽口村の田圃の神ゐ祀ゐる祠ゐ
三十一條本生ゐる祠ゐ傳ゑ足利義教公富士見ふ下向の時ゐ祀の
鼠々松

浜松より近海某関白晴嗣公又龍山公ゐや
吾妻の方へ御こゆる時ゐあり習駕次止ゐゐ古跡之

下ゆく…張松の古そでんなを祀ひ…
解も酔盛あるれを…ひ…
…の…ふ…ふ…ふ…只…君々…
…の…の…ま…へ…久…松の…
青林山頭陀寺 浜松馬込橋…
幸導薬師佛 高野山法性院の末派…
行基菩薩の作一説毘首羯摩天の作ともいふ
文武天皇 大宝三年草創
阿彌陀堂 丈六の弥陀を安…
東日御師作
勅額頭陀寺 …二王門を…
…三代実録云貞観五年八月二日壬戌以…
遠州頭陀寺預於定額
護摩堂 本尊不動明王永禄無火の後本堂を安…僧院…千手院 實相院
圓成院 安養院 東光院 城就院 往古坊舎数多し今二坊…
植松原 浜松の東植松村にて室町将軍富士見下向の時
…
…
蒲神明 神龍村にあり三代実録云貞観十六年閏四月十一日授遠江…
正六位上蒲太神自伊大刀自神並従五位下を…神主蒲…
延喜式…
…
茅場 …
行程十三里半許
京江古ノ行程同里 町…村をへて…州…
天龍川の西岸なり

大鰐 …
…
…
…


天龍川
石田


船田入道挟大将
新田義貞飛超
天竜川絶橋

きれど天竜川のるゞれをふ流々さ〜て驚波龍門ふるれの死ほひあり普
け重耳を壁ふ投じ槎ふ浮へて星斗ふ近さ天呉〜ろむ〜達成の孔ふ
新田花中将義貞東國の軍に利あ〜ざ〜ろ〜ざ〜ろ〜ざ〜ろ

平重衡は
西海の合戦に
おまけてとられと
なりて鎌倉へ
ちうゆふとした
沈田の宿にて
泊りゆへ然世
侍従出て
宗盛にに
寵せられしが
もひなれりして
琴弾あ風ひ
て勞を慰る
梶原平三
傍にあり
眼をむれ
苦がんせ
ちくなる
あよあふ
悪さ
凡俗
なるべし



春泉画

銀闕玉樓
帯晩霞惜
春舞袖獨
堪嗟何謀
為得新恩
寵無奈東
方及落花

箕山



沈田宿（ぬまだのしゅく）　いるしくも天狭川の西岸ありし古人の紀行多くは沈田の宿ありて天狭川（あまのさがわ）と渡らと書きうる後世川瀬変じて東岸となる

ま　我れやこの里々沈田と成ぬるまでと詠まれしとぞ　春慈法師

富士紀行

当なるる沈田の里は民まで

丙辰紀行

もみぢを敷代ふあるうれしくさ　克彦法師

冥濛の青墓遠江の沈田駅江のも越行きも長者遊君ありてむつ一夜

泊還の武士程なく少年鞍馬江門ふはるぎ千金ふ笑を買てこそ

かの江口の洋ふと争たるうん夫婦大尽のめされ一湯谷もは沈田乃

宿のむもあにあ仕うる事学ふくらいくさ

形だるう残るて絶多る小民どもて一今ハ宿主龍のたの東れ

天誅とて二のふおくるる新田左中将の尊氏と我ハ員てもられ

々る時深橋の桁はおりる々ふ敷布施被られ々るもふくの事七江都ゲ

捷の巴々るふ深私の巻ぞ多細流ふ山天彩の事七と今ぞいつふ

池田驛　長本倡家處子ノ嬋娟天下ニ鴻ル腰似ニ楚王宮裏ノ柳一面ノ如ニ巫女廟前花一古今不レ盡洪河ノ水淵瀬相移兩岸沙治乱興亡非ス我カ事ニ征鞍暫ノ憩ヲ且ノ賞ル茶ノ

羅山

重陽（菊花節）

深名の橋と渡るふて私の橋ふ風さくく入江ふ噪ぐ波の音さうでも

旅ら物憂ふ心ふ盡まゆ間々れ池田の宿ふも若ひ恋かの宿れ長

者館ふ女侍従の群小菊ふ袖せうれうう侍従二位中将殿

ふ見替て日ふ々ふ伝ふだふ思ふ事ふりふらぬ人のふふかる所へ入くせ

ゆ事の不思議さふくそ一首の歌ふ

熊野侍従

旅れやはふ婦れ小屋のいせさふ故ふうふ恋一つるん

二位中将

ふるさとふ恋くも今一旅の空都も縁のをそうるく袖

や有ふ中将旅原ふ云く歌をふ只今れ歌のぬ一へいうる事ぞ難

しくふ仕うるとの外と宣くべ急時景く申ふうふ恋ら一い袖さ

ふ濡一めされいわぞくあれふ八橋の大尽殿のまこ志岡の守

ゆく波らせゆひ一附めされまつ一せそ御最愛ひひ一ふ老母故ふそ

痛うりふをべ都ふうふ御暇を申上し一かでも給らざれで須へ袂ふの初雪ふちらん

いふせん都れ妻をも一れと

とゝいふ名の仕丁を賜ふ〳〵はうそでうひ〳〵海邊一の美人也我
申々る都於歩〳〵日数経られど絲生の羊さ〳〵妻も院ふ暮れんこゝ遠山
の花の殊の香かとうえ〳〵濁々滝々雲渡る越方の末の事どもと於
ふひはぐあゆふをさゝいうる行宿業此方見さよと宣〳〵て
はれせねとものを浪ぬうり

熊野侍従古蹟 沈田の宿攝取山行興寺といふ時宗の梵刹沈田北者熊野ゞ古蹟ありと聞ゆ

祉田宿 舊ゝ天龍ノ上ノ退可帰宗盛ノ領ニ聲色活湯谷壊殘林叢ノ中共ニ相ノ従ノ

熊野墳 平堂の例ふわり紫石の塔婆建久九年五月二日没すと銘を

同老母墳 同所あり狼銃石の塔婆建久元年四月三日没と傳ふ

侍女彝墳 近隣ふあり沈田者ふ南ゝ里許ゝ

されを沈田の長とゝいるを今れ本陣宿のゝ仁安の頃ゝ長者ふ
ゑゝ行りゝ六一女ふ於儲く其名於熊野
と名付ゝ立の家ゝをゝりゝ〳〵ゝ雲髻花顔一

笑ふ金の併も今いむりゝとゝりて鬼火さよおぐれよゝ多く枯體朝
あゝ〳〵ふ暁く秋某墓畔小ゝる一某蘇ゝの二ゝ於ゝの上人真教
圀めぐり行時ゝて泊るゝ熊野ゞ善提を弔ひ夜沢流のちゝ〳〵まれを迎
田道場よふとものゝ〳〵ゝ

中泉 沈田のゝうゝゝ一里餘ゝありむうゝ沈田者ゝう號ふ
八幡宮 境ゝ村ゝあり石清水ゝ
櫻ケ池 中泉ゝうゝあの方ゝ一里許ゝ
中顧ゝある者の強飯ゝ
其強飯ゝゝと顧ゝ
顧ひゝゝ
沈むゝ一ゝ
傳ふ云むゝ〳〵比叡山肥後の阿闍梨源皇ゝいふる私ゝ三塔無双の学
者ゝ黒谷法然上人の師ふゝて沢源の字於賜ゝ源空ゝも名乗ゝふ称ゝふ源皇
阿闍梨ゝ〳〵ゝ業ゝる仲道の渕底我一生の修行ゝゝい悟ゝ事ゝゝ
弥勒ゝ出ゝ於後ゝ〳〵會ゝ曉ゝ顕ゝべ〳〵ゝ命於保ゞ龍身ゝ

さくらの一於是空弓号泣請留ふ下し龍女捷訴をうんせしむるに東国より使者
並擬け註記とゝもくる僧帰り来つて申やう
あり唐の蒼海洋々さして少し青山峩々たり其間ふ池水ふ湛へ深座
路あり一旦法澄ふ一て龍蛇の捜べきふ非ず
所領と申せ河圖梨ふれを受へ池大寺及び我檀越と争ふ時ふ
役をゆへく申うけ或夜座禅して一滴の水を掌の中ふ掬り雨風沢起し
雲ふ乗して遠江桜ヶ池ふ到り入定しぬれば波瀾をさまへく驟雨車
牀のふく雷電轟霹して村邑動揺し其後源空上人ふ国よりまさふ池
頭ふ除之師者れ別まと嘆ひ恩謝の為ふ弥陀経を誦一称名念仏一ゆで
渉両しさ大蛇の形と現れ池上ふ頭を揚て落涙の体し源空上人も共ふ
涙を流へ師者れ仰ぎ見奉りて本地丸人体ふくさせゆくとおりへ
かば龍身変じて源皇河圖梨と成へ永くこ会ふ暁ふ待ゆふ其難行とゞめ
て亦身成仏ふ勧免ゆうざるを学へくれゆふいふ
○對て三佛通ふ大乗ふ縁覚聲聞の二教あり縁覚ふ十二
因縁を観へて得道ふ聲聞ふ四諦と観へ得道ふ河圖梨ふ機縁に
基へ大乗教ふへて成仏の因ふれを見張りて姑龍身ふ依て龍女ふ
會ふ暁ふまりこれを般若獨覚行といふ大乗ふ論倶舎論成實論四教儀
等ふんへくり又ふ河圖梨の智識たるまで凡愚のかゞるふあへくて法然上人
猛ふを嫌ひなふよ非ふ修行の成就を察へてお安の楼を鑑へ弘通へふ
浄土門と南師偏ふ権化の再来ふれたる凡俗の身とへ龍體ふとへゆふ
誹謗をへくふあへくふ慈悲僧正ふ仮ふ魔界ふ入へ生を度もるれ誓願あり
慈覚を入師を天台山の九頭の竜と現へ弘法大師ふ真言秘密をふ門て

○或土俗向て云法然上人ふ浄土一宗ふれ元祖ふて宗風海内ふ充満ゆり今ふ盲
餘年ふ及も貴賤かの教をうけて浄土往生ふ治定を源皇河圖梨ふ俳
通修行の師之畜身と成て善根へ永くこ會ふ暁ふ待ゆふ其難行とゞめ
て亦身成仏ふ勧免ゆうざるを学へくれゆふいふ
○對て三佛通ふ大乗ふ縁覚聲聞の二教あり縁覚ふ十二
因縁を観へて得道ふ聲聞ふ四諦と観へ得道ふ河圖梨ふ機縁に
基へ大乗教ふへて成仏の因ふれを見張りて姑龍身ふ依て龍女ふ
會ふ暁ふまりこれを般若獨覚行といふ大乗ふ論倶舎論成實論四教儀
等ふんへくり又ふ河圖梨の智識たるまで凡愚のかゞるふあへくて法然上人
猛ふを嫌ひなふよ非ふ修行の成就を察へてお安の楼を鑑へ弘通へふ
浄土門と南師偏ふ権化の再来ふれたる凡俗の身とへ龍體ふとへゆふ
誹謗をへくふあへくふ慈悲僧正ふ仮ふ魔界ふ入へ生を度もるれ誓願あり
慈覚を入師を天台山の九頭の竜と現へ弘法大師ふ真言秘密をふ門て

倶利伽羅龍と現ゝ観音薩埵と三十三の変身あり行ること大進の方便

ふかゝぬこと也ゝ法然上人師承れ約あればまふ到ることあふ海さ於ても約ある

がたきなんゝ凡慮の如お測所よあゝと言られゝと安へゝこ

今の浦 見附 遠江 名寄 八幡宮の後ま池ありて名寄 今のうつの浦 名寄 おふふ宿ありて一日二日とまりたるほどふ海士の小舟ふ

棹さゝはく浦の色を眺んめぐれば塩海れわたりさそ〳〵趣たく

ま〳〵南ふ松浦の波神ゝしく長松の風ふをいさゝゝむ名残

多ゝり〳〵橋本の宿まで似てるさのくふのめそくりなゝずへ是もおろ

さま〳〵そゝをあゝざゝはゝ今ゝ覚〳〵

浪れ音と松もおりしも今の浦ふさのふれ里の名残をそ歩 光行

袋井 十六夜日記 まく〳〵き里半 富士山あゝまるゆく見附 磐といふ

おそろしの

遠州櫻池





良嶽の源皇なるさは
龍界を奪の時を
待ひなく龍と成て
遠州櫻池に入定
しゆふ法然上人
師恩を報ぜん
のに到て龍身と
答ねしてゆつりのふ
師資共に推化の
再来なれば凡人
これを強ぞる事
なかれ


志留波礒
土人志ろはと


万葉　山名郡丈部
等倍多保美
志留波乃伊宗等
爾閉乃宇良等
安比弖之阿良婆
己等毋加由波牟
之の浦ハ筑紫犯法の
國ゆゑあらしかと也と
おもせしハ古代の
風韻なるん

妙星寺 沓透村にあり日運宗観妙山と号し宗祖日蓮上人の父貴名重忠文婦の石塔あり

名産花莚 沓部村の名物にして花莚は織て諸國へ賣ふ

腹川脊川 沓部の東にあり此西川表の末にて小結多くする又腹川村脊川村あり

名宝

たら川やせ川の名は底清さまむ里人の心をぞ志れ　雅経

志る波儀 榛原郡横洲賀と相良の間にあり白羽村の門前後に駒形明神の祠を社説云祭神彦火々出見尊豊玉姫玉依姫の三座也安閑帝元年十二月十五日鎮座しゆへ社頭に燈明臺あり渡海船の極とす沖に大岩あるにあり志れ波沖前岩といふ此地遠江東南の隅にて大井川に近し

真淵云志るは此儀も其国にて東南にて横沢賀といへる所にありし荒海の中に巌のたゞくと張りなるひ出て汐ゐれば馬の脊のごとくはたゝきて救くし見る里人は七十五回は駒形にいひなるなし其所の神を駒形明神と申す彼遠江の國にて船人の名をしりしましとするは此巌にあらる浪あらるにあらずて

沖は船を向きしも岩波の志るは此儀にかゝる白ゆふ　真淵

東海道名所圖會卷之三終